

清武町埋蔵文化財調査報告書 第4集

TUNO GAMI BARU  
角 上 原 遺 跡 群 II

TASHIROBORI  
田代堀第2遺跡  
田代堀遺跡D・E・F地区

1993

清武町教育委員会





田代堀第2遺跡弥生時代遺構検出状況

## 序

昭和63年度から実施してきました。角上原地区の埋蔵文化財発掘調査も平成4年度を持ちまして終了いたしました。ご理解、ご協力いただきました関係各位には深く感謝いたします。

町内ではじめての広範囲にわたる調査により、本町の歴史上貴重な資料が蓄積されました。今後は整理作業を行い、随時その公開に努めていきたいと思っております。

本書はその角上原地区2冊目の調査報告書となります。本書が今後歴史資料として活用して頂ければ幸いです。

平成5年3月

清武町教育委員会

教育長 黒崎 改 司

# 例 言

1. 本書は清武町大字今泉字田代堀、上ノ原、草刈道、三角堀（通称角上原）にて行われた県営圃場整備事業南今泉地区角上原工区に伴う埋蔵文化財発掘調査うち、平成3年度調査の田代堀D・E・F地区及び平成4年度調査の田代堀第2遺跡の報告書である。

田代堀遺跡D・E・F地区については道排水路部分のみの調査で、遺跡としての明確な性格、範囲までとらえられなかった為、調査時の調査区名で報告する。また田代堀第2遺跡については平成2年度調査の三角堀遺跡の範囲として調査、整理作業を行ったが、出土遺物、遺構等の検討から三角堀遺跡とは別遺跡とすることが妥当と判断し、所在する字名から田代堀第2遺跡として報告する。

2. 発掘調査は宮崎県中部農林振興局の委託を受け、平成3年度は平成4年3月2日～3月31日4年度は平成4年5月6日～9月30日までの期間で行った。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 清武町教育委員会

教育長 黒崎 改司 教育次長 岩切 哲

社会教育課長 谷口 忠誓

同課長補佐 平成3年度 小城 員久 平成4年度 押川 正信

社会教育係長 平成3年度 押川 正信 平成4年度 鑑 和俊

庶務担当 社会教育課主任 岩切 弘子

調査担当 社会教育課主事 伊東 但

調査補助員 社会教育課嘱託 的場 文明（平成3年度）

調査補助 宮崎大学教育学部考古学研究室学生

林田 和人 東 浩行 山崎 亜実 松田 佳子

指導・協力 宮崎県教育庁文化課 主査 石川 悦雄

主事 戸高真知子（平成4年度）

田野町教育委員会社会教育課主事 森田 浩史（平成4年度）

4. 調査時の図面作成は伊東、石川、戸高、森田、的場が行い、写真撮影は伊東が行った。また、遺跡全体の測量については(株)地域開発研究所に委託した。

5. 本書の作図、トレースは伊東と的場が分担して行い、写真撮影および執筆編集は伊東が行った。

6. 遺構番号に使用した略号は以下のとおりである。SA－竪穴式住居跡、SB－掘建柱式建物跡 SC－土壙、SE－溝状遺構

7. 挿図中の方位はすべて磁北であり、レベルについては海拔絶対高である。

8. 遺物における図版中の番号は挿図中の番号を表す。

9. 調査においては県文化課石川主査、戸高主事、田野町教育委員会森田主事より多大な援助を頂いた記して感謝申し上げます。



# 本文目次

## 第1章 序説

第1節 調査に至る経過…………… 1

第2節 遺跡の立地と環境…………… 1

## 第2章 田代堀第2遺跡

第1節 遺跡の概要…………… 4

第2節 調査の概要…………… 4

第3節 縄文時代の遺構と遺物…………… 6～8

第4節 弥生時代の遺構と遺物…………… 11～22

第5節 その他の遺構と遺物…………… 24

第6節 まとめ…………… 27

## 第3章 田代堀遺跡D・E・F地区

第1節 遺跡の概要…………… 28

第2節 調査の概要…………… 28

第3節 まとめ…………… 28

# 挿 図 目 次

第1図	角上原遺跡群位置図	2
第2図	調査区及び周辺地形図	3
第3図	基本土層図	4
第4図	田代堀第2遺跡全体図	5
第5図	SC-3実測図	7
第6図	SC-3出土遺物実測図	7
第7図	SC-4実測図	8
第8図	SC-4出土遺物実測図	8
第9図	SC-6実測図	9
第10図	SC-6出土遺物実測図	9
第11図	SC-7実測図	9
第12図	SC-7出土遺物実測図	9
第13図	SC-7出土遺物実測図	10
第14図	SC-8実測図	10
第15図	SC-8出土遺物実測図	11
第16図	SA-1実測図	12
第17図	SA-4実測図	12
第18図	SA-1出土遺物実測図	13
第19図	SA-4出土遺物実測図	14
第20図	SA-2実測図	15
第21図	SA-2出土遺物実測図	16
第22図	SA-2出土遺物実測図	17
第23図	SA-2出土遺物実測図	18
第24図	SA-3実測図	19
第25図	SA-3出土遺物実測図	20
第26図	SA-3出土遺物実測図	21
第27図	掘建柱式建物跡実測図	23
第28図	SC-9実測図	24
第29図	SC-9出土遺物実測図	24
第30図	SC-10実測図	25
第31図	SC-10出土遺物実測図	25
第32図	SC-10出土遺物実測図	26
第33図	SC-5実測図	27
第34図	田代堀遺跡D・E・F地区全体図	29

## 図版目次

図版 1	田代堀第 2 遺跡全景	30
図版 2	縄文期土壌集中地区	30
図版 3	SC-3 検出状況	31
図版 4	SC-4 検出状況	31
図版 5	SC-6 検出状況	32
図版 6	SC-7 検出状況	32
図版 7	SC-8 検出状況	33
図版 8	弥生期遺構集中地区	33
図版 9	SA-1 検出状況	34
図版10	SA-4 検出状況	34
図版11	SA-2 検出状況	35
図版12	SA-3 検出状況	35
図版13	掘建柱式建物跡検出状況	36
図版14	SC-10検出状況	36
図版15	SC-5 検出状況	37
図版16	田代堀遺跡D地区全景	37
図版17	田代堀遺跡F地区全景	38
図版18	田代堀遺跡E地区全景	38
図版19	SC-3 出土遺物	39
図版20	SC-4 出土遺物	39
図版21	SC-6 出土遺物	40
図版22	SC-7 出土遺物	40
図版23	SC-8 出土遺物	40
図版24	SA-1 出土遺物	41
図版25	SA-4 出土遺物	41
図版26	SA-2 出土遺物	42
図版27	SA-2 出土遺物	43
図版28	SA-3 出土遺物	44
図版29	SC-9 出土遺物	45
図版30	SC-10出土遺物	45



# 第1章 序 説

## 第1節 調査に至る経過

昭和63年度より、清武町今泉字田代堀他の水無川右岸台地上（通称角上原）において県営圃場整備事業が行われることとなり、地区内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、事業主体である宮崎県中部農林振興局と清武町教育委員会との協議が県文化課を交え開始され、県文化課の試掘結果を基に極力遺構に影響の無いよう調整が重ねられた。

しかしながら、工法上の調整においても現状保存が困難な部分については記録保存を行うこととなり。清武町教育委員会が主体となって、宮崎県中部農林振興局の委託を受け、年次的に調査を行った。調査は昭和63年度、平成2・3・4年度と行き、4年度を持って圃場整備事業角上原工区分の調査を終了した。

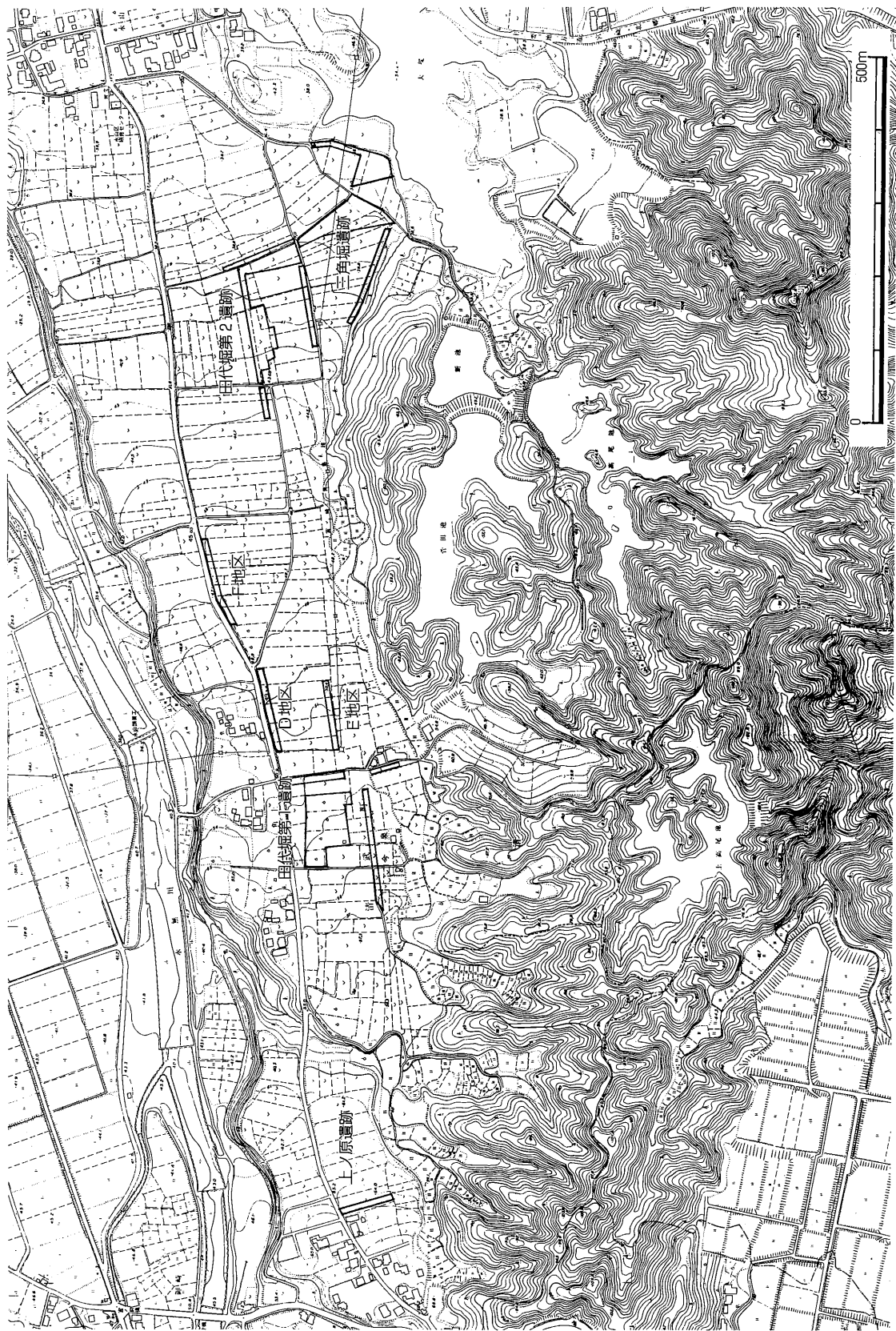
## 第2節 遺跡の立地と環境

角上原遺跡群は清武町大字今泉字上ノ原、田代堀、草刈道、三角堀の通称角上原に広がる遺跡群の総称である。水無川の右岸の段丘上に位置し、後背に鰐塚山系の山々を控え、その山裾部に湧水点が点在するという環境にある。この段丘平坦面は標高を下げながら東に連続し、宮崎学園都市遺跡群が所在する台地下段の低位面に繋がっていく。

角上原における遺跡のあり方については、比較的現状保存が可能な平坦な地形で工事による影響を受ける調査部分も少なかったこともあり、段丘上の全体像はつかみ得なかった。比較的広範囲に調査を行った田代堀及び三角堀の一部については旧石器から中世にかかる遺跡が部分的ながらも捉えられ、時代をとおして人々の生活の基盤となった様相が伺える。

この段丘については町内で一般的に見られるシラスを基盤とした所謂シラス台地とは趣が異なっている。水無川を望むこの段丘の崖面には6～7m厚の礫層が見られ、その下位に厚さ4～50cmのシラス層が位置している。この様相は水無川対岸の崖や清武川に合流後の左岸露頭でも観察され、シラスを噴出した始良カルデラの噴火以降、現水無川に沿って大規模な土石流が起こった事が伺える。角上原では63年度調査の上ノ原遺跡、田代堀遺跡で細石核やナイフ型石器が出土しており、段丘基盤の形成期は始良カルデラ噴火の約25000年前から旧石器時代終末期までの間と考えられる。





第2図 調査区及び周辺地形図



## 第2章 田代堀第2遺跡

### 第1節 遺跡の概要

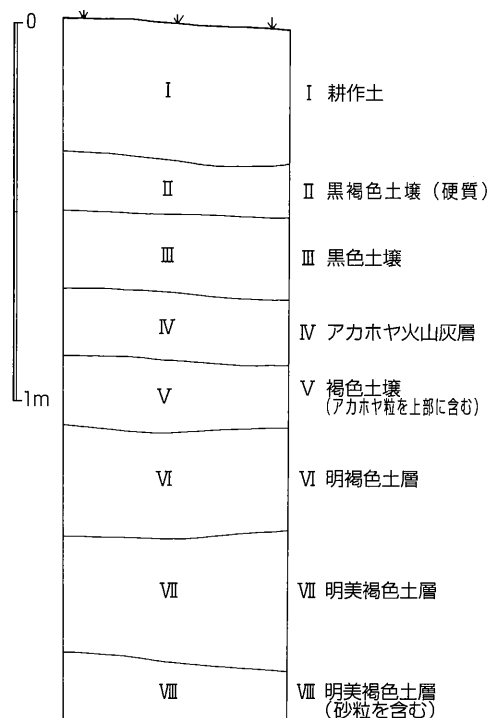
本遺跡は平成4年度事業区内字田代堀に位置する。本段丘上の調査において比較的広範囲に調査をおこなったのは昭和63年度の田代堀第1遺跡と本遺跡周辺だけで、他は道排水路部分の調査だったため遺跡の広がり等の把握は困難であった。本遺跡周辺でも平成2年に調査を行い小字名から三角堀遺跡とした調査区から3カ年にわたりつぎはぎ状の連続調査となったため、小字界を越えても三角堀遺跡の広がりという認識で調査を進めた。しかしながら最終的に各調査区をつなぎ合わせ整理を進めるに従って縄文時代晩期の遺構、遺物により連続性を持つが、三角堀遺跡は縄文時代前期、小字界を超えた部分は弥生時代を主体とすることが明らかとなったため、三角堀遺跡から切り離し、田代堀第2遺跡として報告する事とした。

三角堀遺跡、田代堀第2遺跡とも角上原段丘上の南東部に位置し、東方の学園都市遺跡群の立地する台地の北へ開ける谷の最奥部を望む場所に立地する。この谷の最奥部は江戸時代以降、農業用溜池として整備され、現在は大堤池という名称で呼ばれていて、田代堀第2遺跡は三角堀遺跡よりこの谷に対しやや段丘内部に位置している。

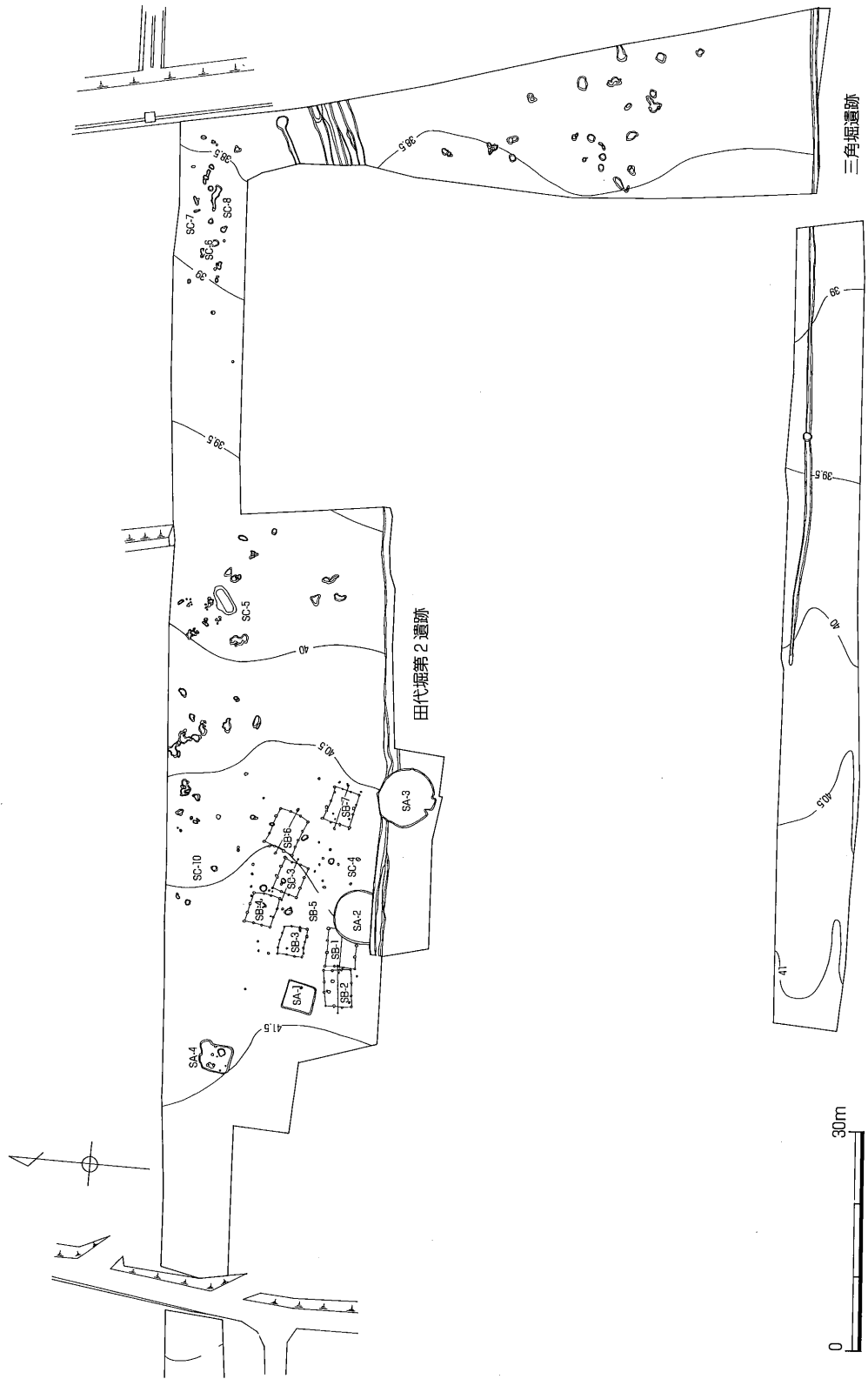
### 第2節 調査の概要

調査範囲は工事に現状保存な困難な道排水路部分と削平される面工事部分を対象とし、想定される遺跡範囲をコの字状に3調査区に分て調査する結果となった。3調査区の合計面積は約6200㎡、このうち北側の面工事部分に遺構が集中して確認され、周囲に比べてわずながら高まりを見せる地形も併せて、この部分を遺跡の中心部分と認識した。

調査対象地は一部を除き、アカホヤ層まで耕作により攪乱されており、この耕作土を重機により除去した後、一部残存していた二次アカホヤ層中の遺物の取り上げ及び精査を行い、弥生時代の間仕切り住居を含む竪穴式住居跡4軒、棟持柱を持つものを含む掘立柱式建物跡7棟、溝状遺6条、縄文時代の土壇10基とこれらに伴う遺物を検出した。



第3図 基本土層図



第4図 田代堀第2遺跡全体図

### 第3節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1. SC-3 (第5図 図版3)

平面形は直径約80cmの不正形な円形、深さ18cmを計る。比較的底部は平坦で急角度で壁が立ち上がる。

埋土はしまりない二次アカ状の褐色土で、多数の土器片とノミ状の磨製石器が検出された。

#### 出土遺物 (第6図 図版19)

出土遺物はいずれも浅鉢形土器片と思われる。1～3は口縁部片で磨研土器である。4は口辺部片で口縁部を欠損する磨研土器である。5～7は粗製土器の体部片で5・7に屈曲部が見られる。8・9は粗製土器の底部片で裾の張った安定感のあるものである。10はノミ状石器で石材は頁岩、11は磨石片で両面とも平坦に摩滅している。石材は砂岩である。

#### 2. SC-4 (第7図 図版4)

平面形は不正形な円形で経約85cm、深さ約28cmで平坦な底面から比較的急角度で壁が立ち上がる。

埋土はしまりない二次アカ状の褐色土で埋積土上層より土器片、磨製石斧等が出土した。

#### 出土遺物 (第8図 図版20)

1は浅鉢形土器の口辺部片。2は口辺から体部片で屈曲部を持つ。3は体部片で磨研土器。4は体部片で粗製土器。5は磨製石斧片で端部に打痕が残る。

#### 3. SC-6 (第9図 図版5)

平面形は円形で経約85cm、深さ約18cmを計る。比較的底部は平坦で、埋土中から土器片が出土した。

#### 出土遺物 (第10図 図版21)

1は浅鉢形土器の口縁部片。2～6は浅鉢形土器の体部片で2は屈曲部を持ち、5のみ磨研土器である。

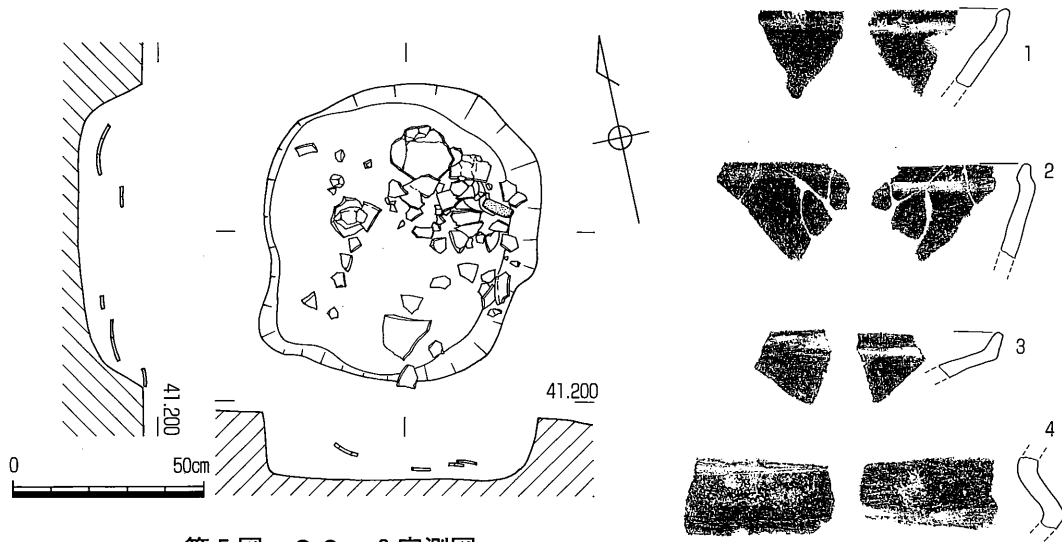
#### 4. SC-7 (第11図 図版6)

平面形は不整な円形で経約60cm、深さ約20cmを計る。底面は比較的平坦で埋土中より土器片が出土した。

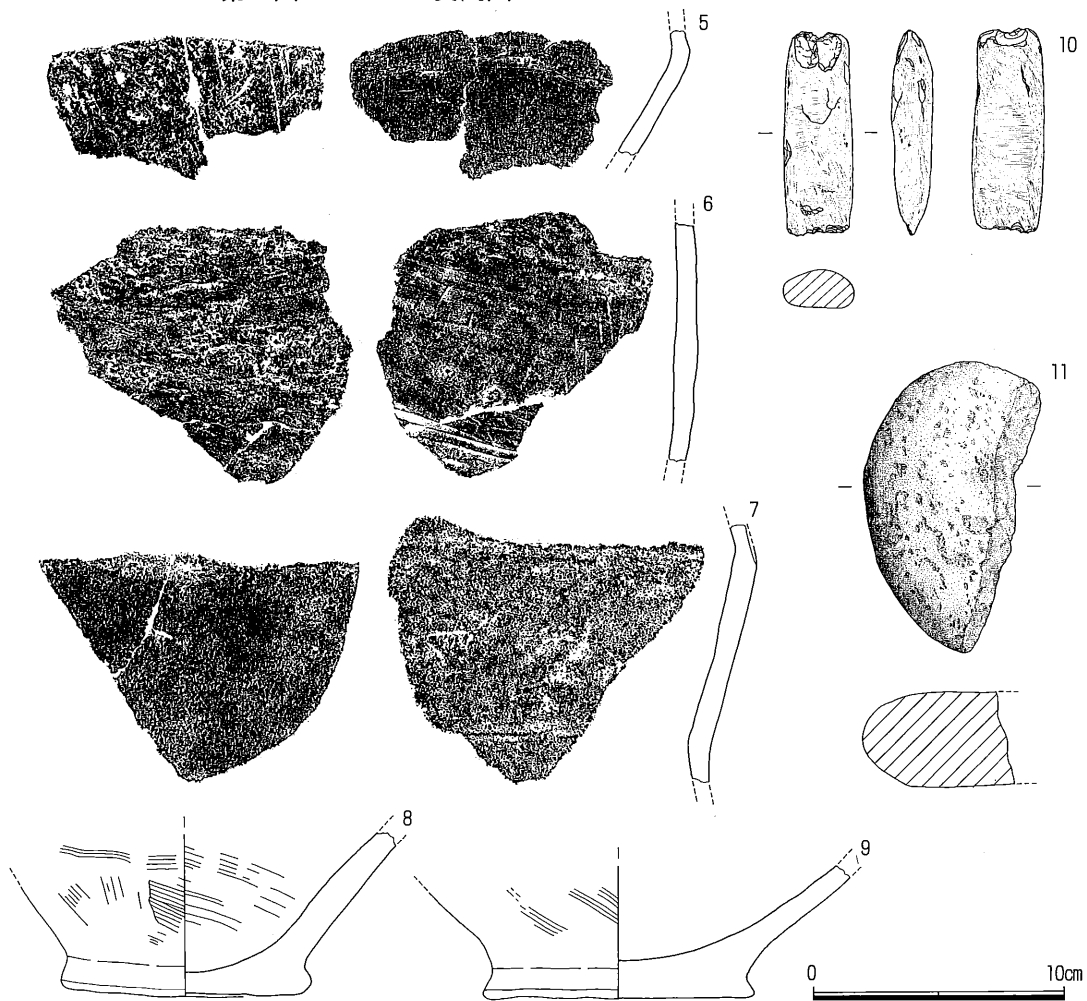
#### 出土遺物 (第12・13図 図版22)

1は鉢形土器の口辺部片で大きく外反し、口縁部外面に粘土紐を張り付け肥厚させている粗製土器である。2は浅鉢形土器の体部片で屈曲部を持つが磨研されていない。3～4は鉢形土器の体部片で5のみ磨研土器である。6は切目石錘で砂岩製である。

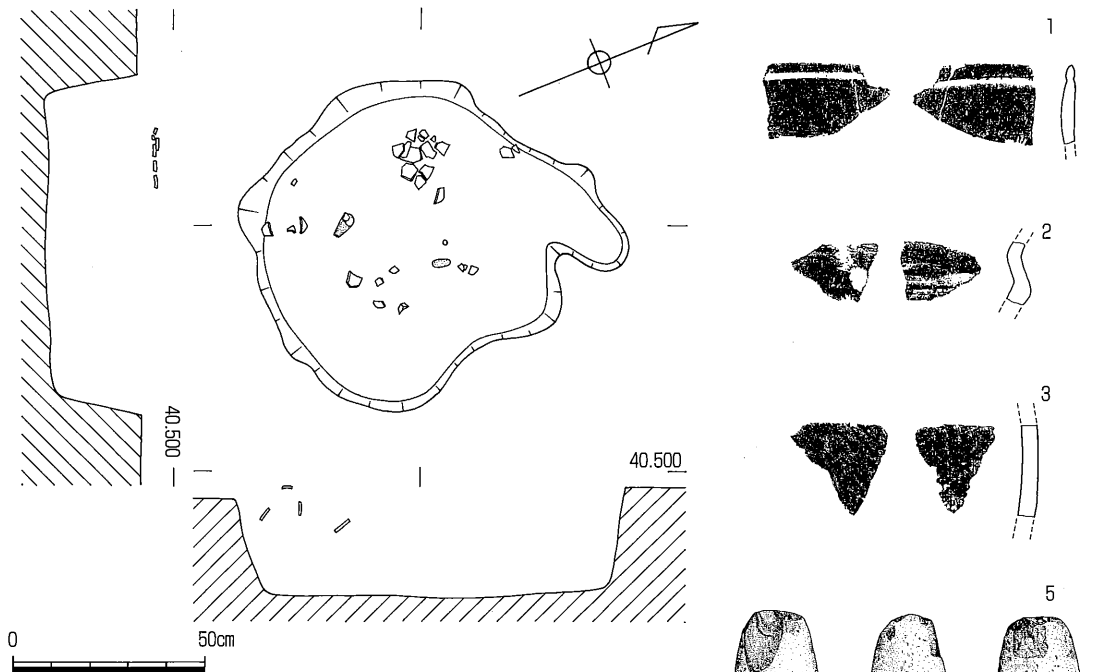




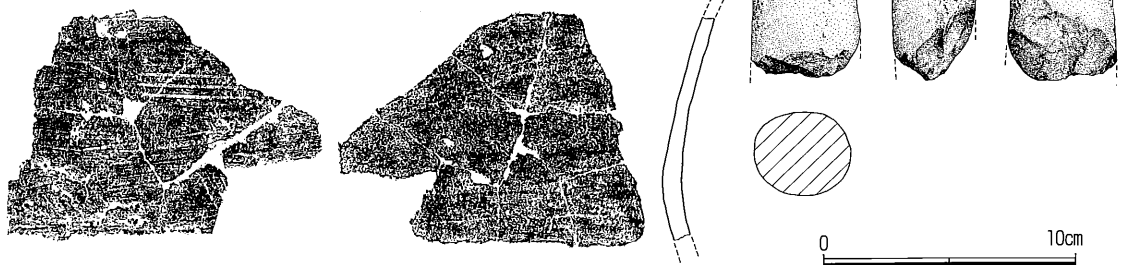
第5図 SC-3実測図



第6図 SC-3出土遺物実測図



第7図 SC-4実測図



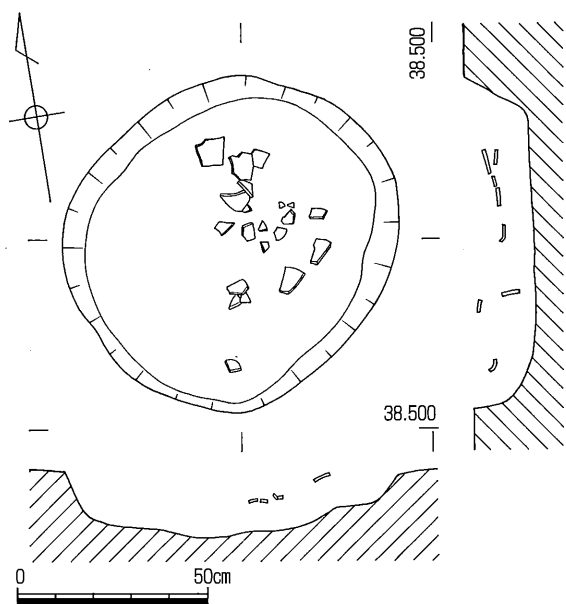
第8図 SC-4出土遺物実測図

5. SC-8 (第14図 図版7)

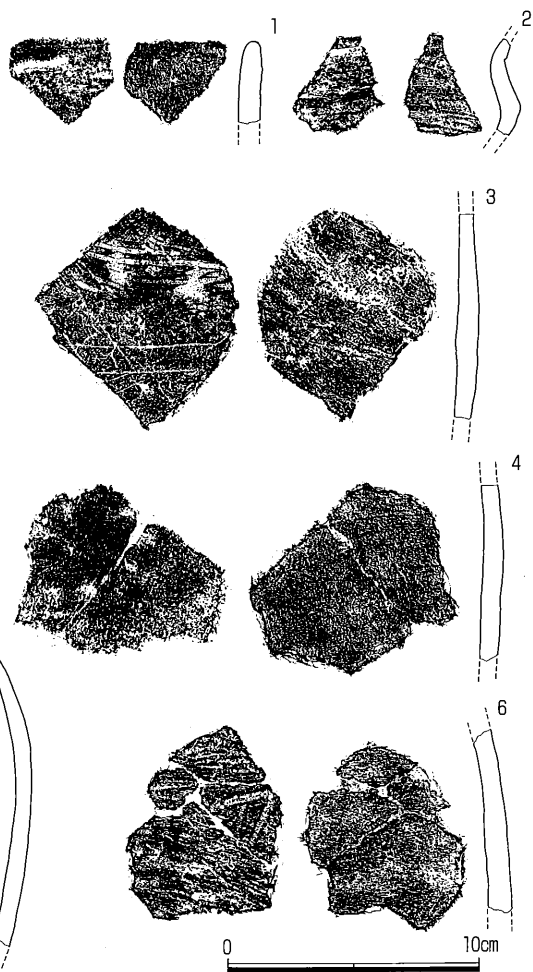
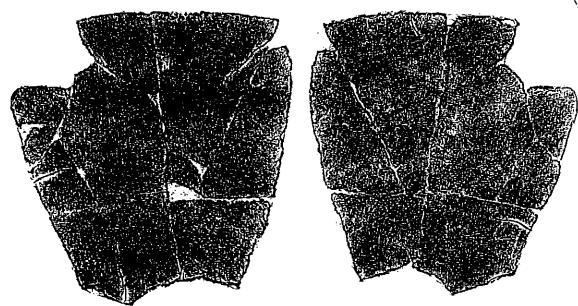
平面形は攪乱を多数受け明確でないが、遺物の包含状況から長軸約1.4m、短軸約60cmの楕円形プランと思われる。深さ約8cmの残存で底面は多数の窪みが見られる。

出土遺物 (第15図 図版23)

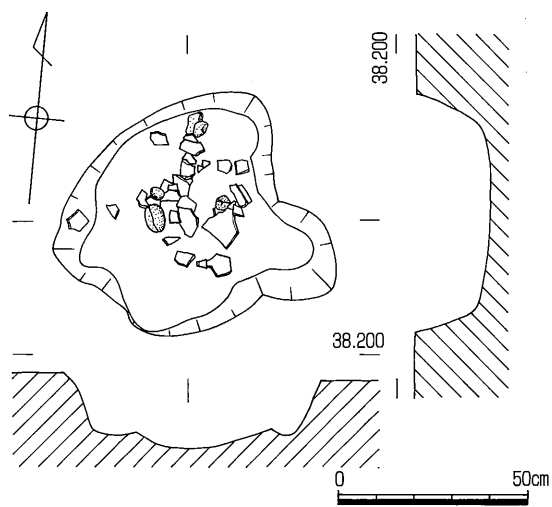
出土遺物はすべて土器の体部片で浅鉢形土器と思われる。1及び5は磨研土器である。



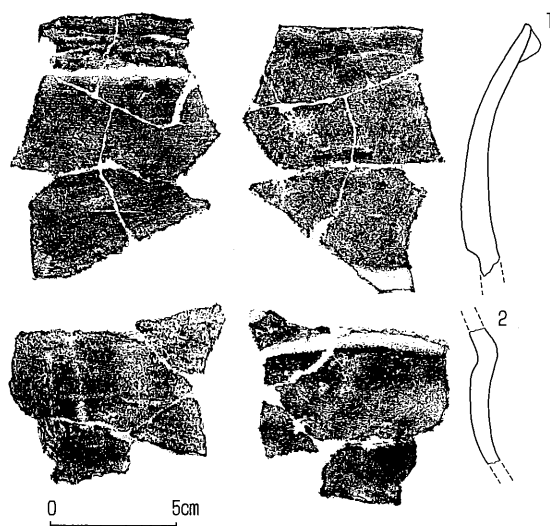
第9图 SC-6 实测图



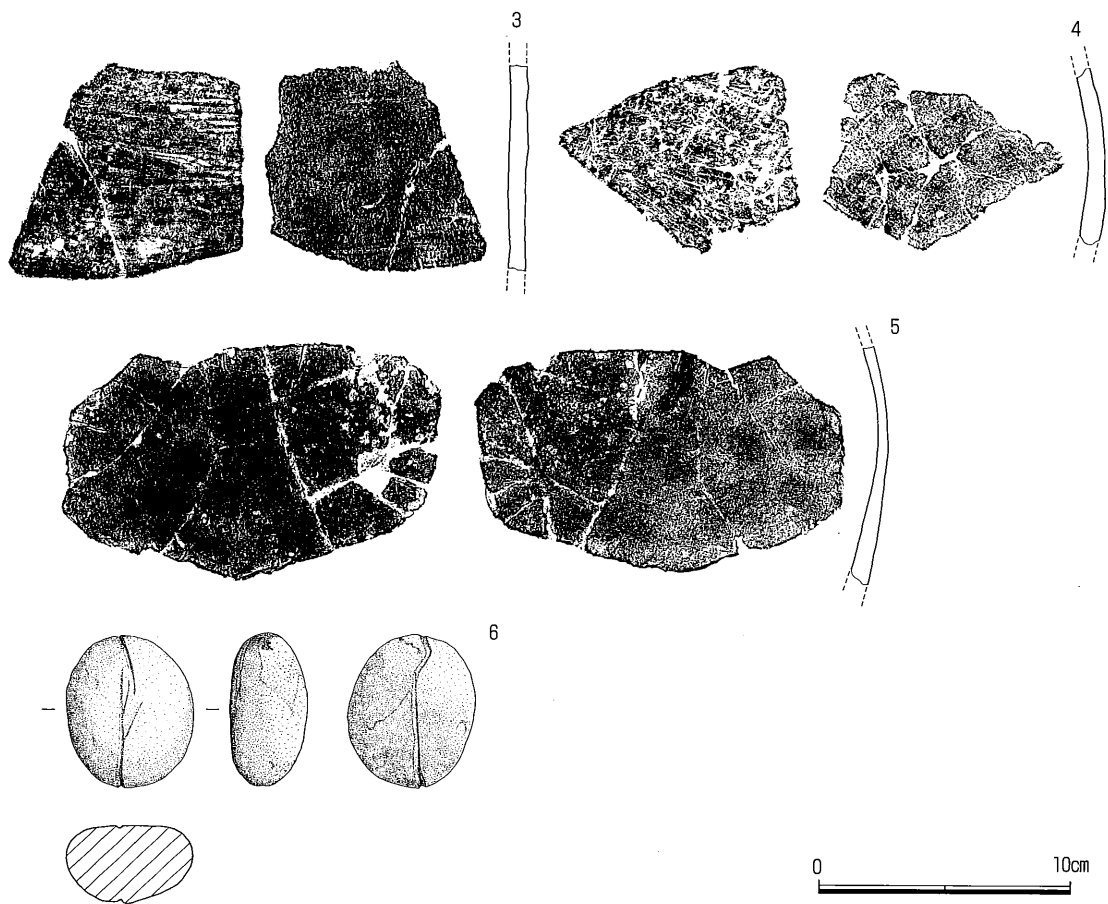
第10图 SC-6 出土遺物实测图



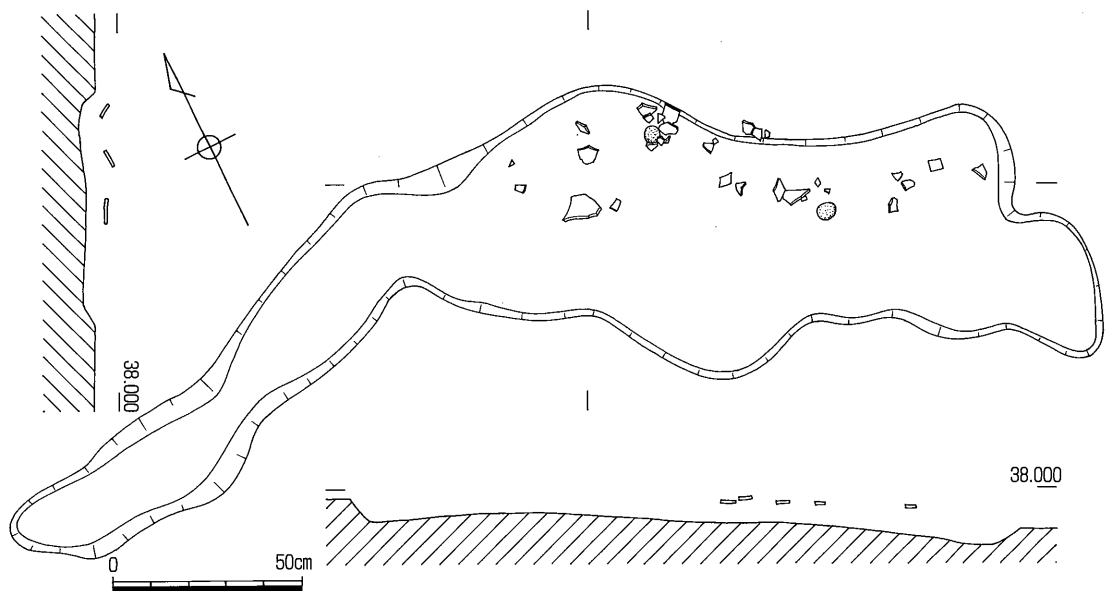
第11图 SC-7 实测图



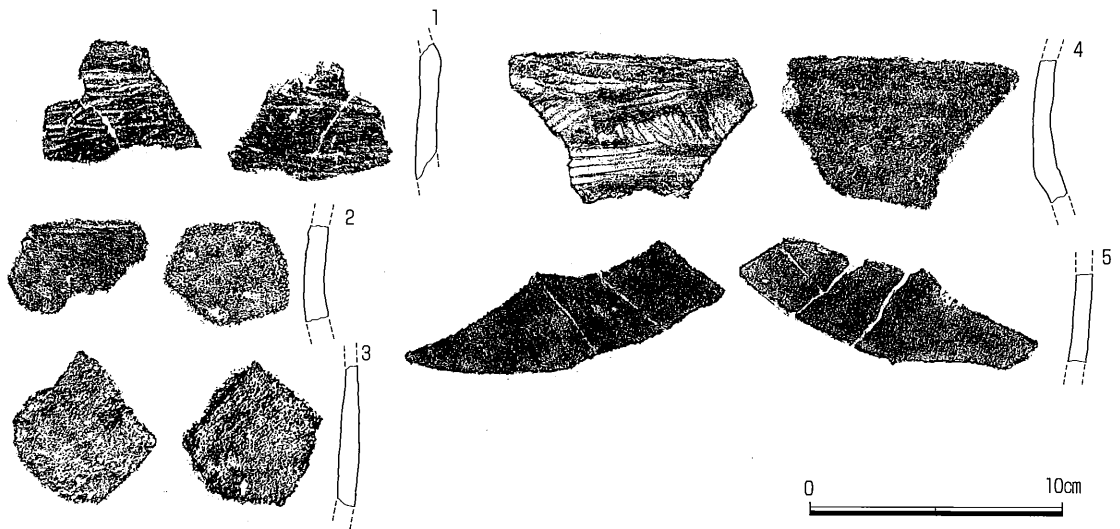
第12图 SC-7 出土遺物实测图



第13図 SC-7 出土遺物実測図



第14図 SC-8 実測図



第15図 SC-8 出土遺物実測図

#### 第4節 弥生時代の遺構と遺物

##### 1. SA-1 (第16図 図版9)

4.1m×3.8mを計る方形プランの竪穴式住居跡である。残存壁高は約25cmで柱穴は確認出来なかった。

出土遺物 (第18図 図版24)

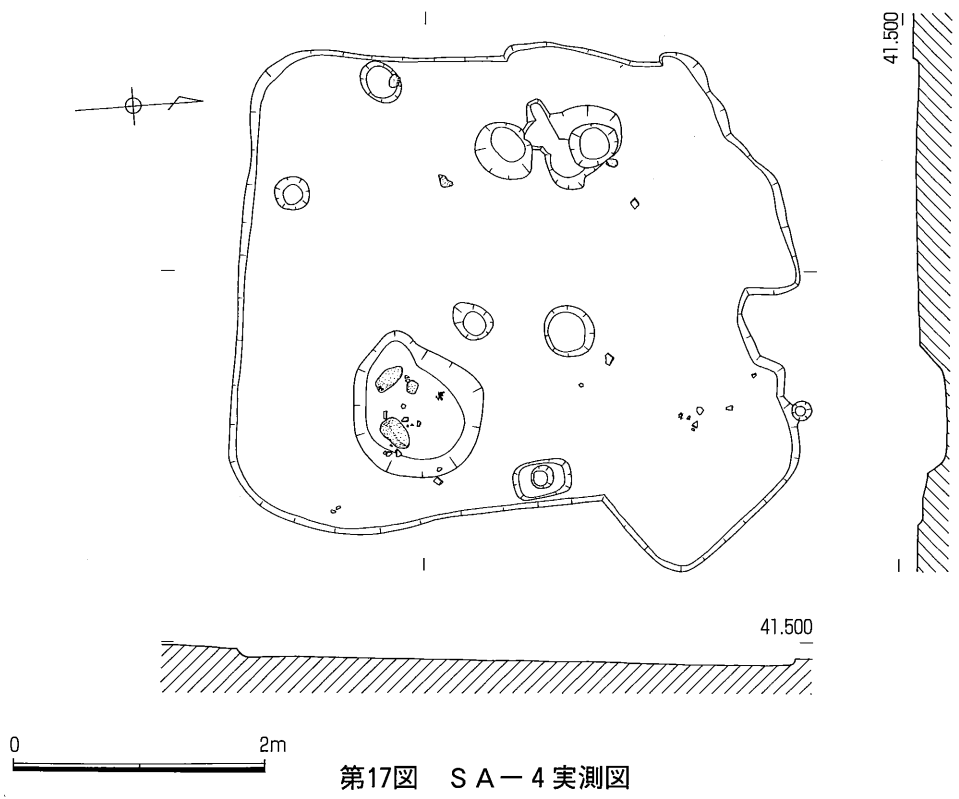
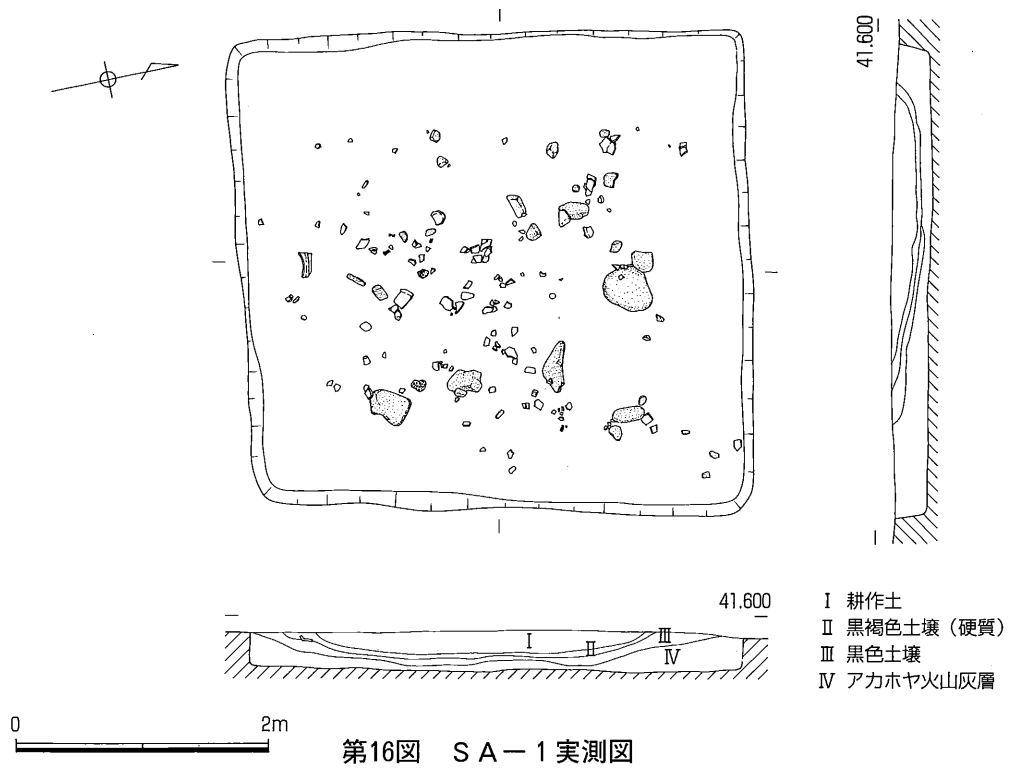
1～6は甕の口辺部片である。2・3・6は短く外反し、口唇部が平坦に整形されている。4・5は直口ぎみの口縁下に刻目突帯を持つ。7・8は壺形土器で7はやや外反する口辺部。8は口辺部から胴部片で胴部上位に五条の突帯を巡らせる。9・10・11は底部片で9・10は上げ底状の甕の底部。11は壺形土器の底部片と思われる。12は磨石片で砂岩製。13・14は軽石製の石製品で一面が平坦に摩滅している。15は蜂の巣状に穴のある砂岩塊で現在でも数km離れた日南海岸の隆起波食海岸で見られるもので、目的は不明ながらそこでの採集品と思われる。16は叩石。17は石皿状の石器で片面中央部に打撃痕を残す。

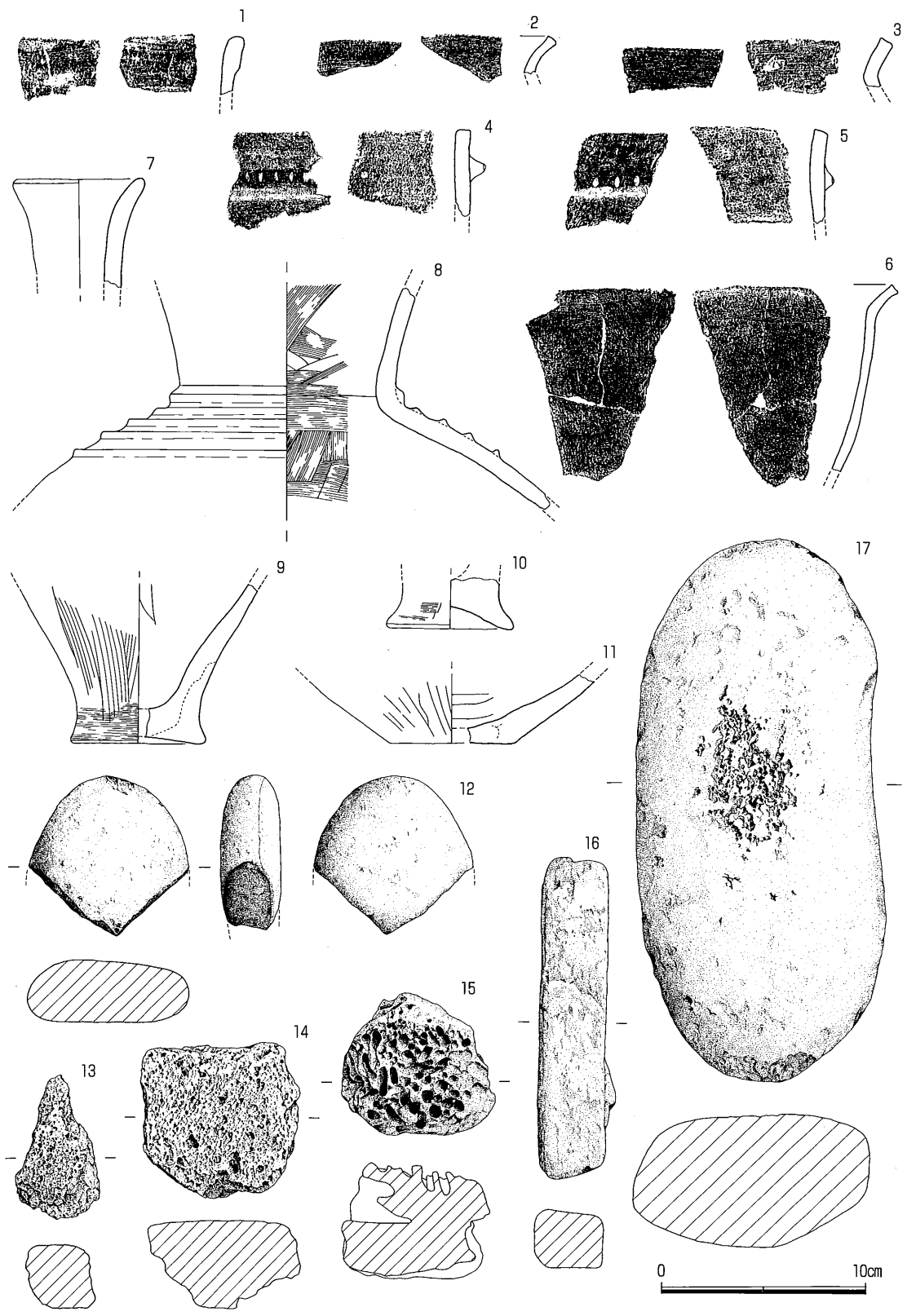
##### 2. SA-4 (第17図 図版10)

一辺3.5～4mを計る不整形な方形プランの竪穴式住居跡で、残存壁高わずか3cm程だったこともあり、北壁部の不整形な部分も攪乱なのかどうか明確に出来なかった。床面に複数のピットが検出されたが、柱穴状のものは確認出来なかった。

出土遺物 (第19図 図版25)

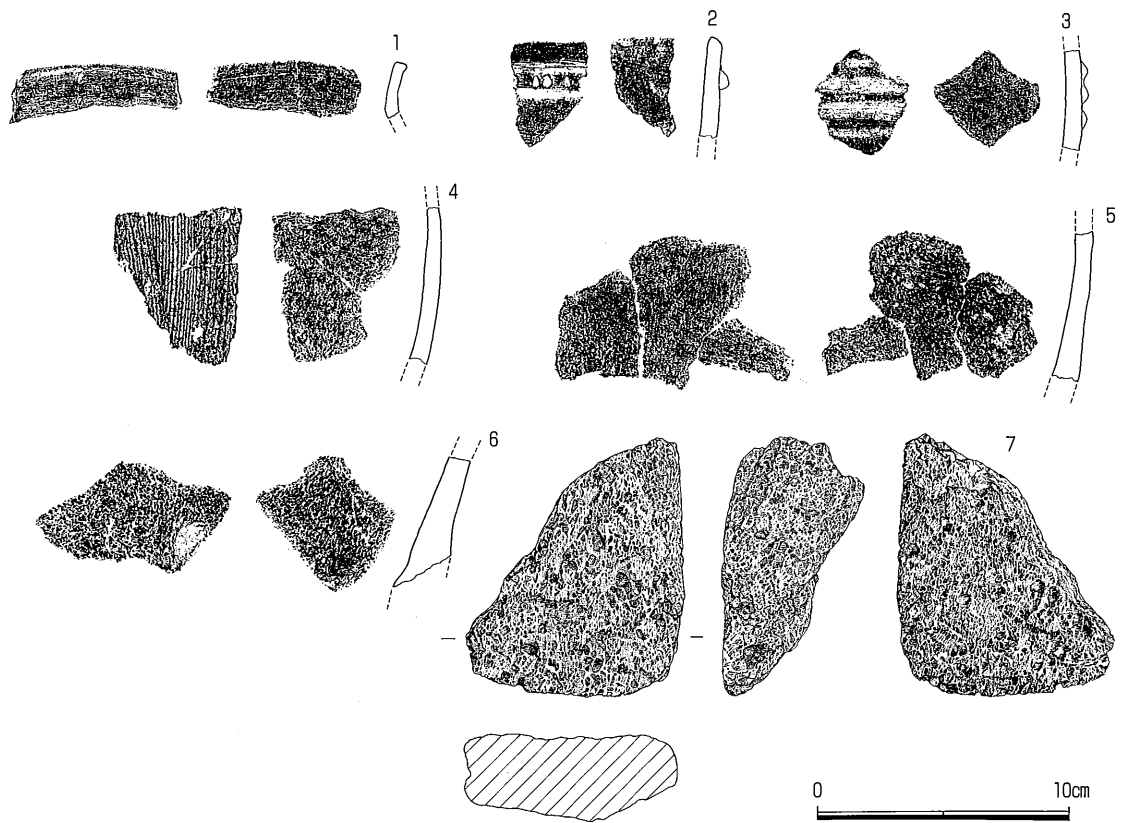
出土遺物は僅かである。1・2は甕形土器の口辺部で1はくの字口辺で口唇部を平坦に整形している。2は直口し、口縁部直下に刻目突帯を有する。3は壺形土器の体部片と思われ、三条の突帯が確認できる。4・5・6は甕形土器の体部片で、4は外面に刷毛目調整を明確に残す。7は軽石製石製品で性格は不明。





第18图 SA-1 出土遺物実測図





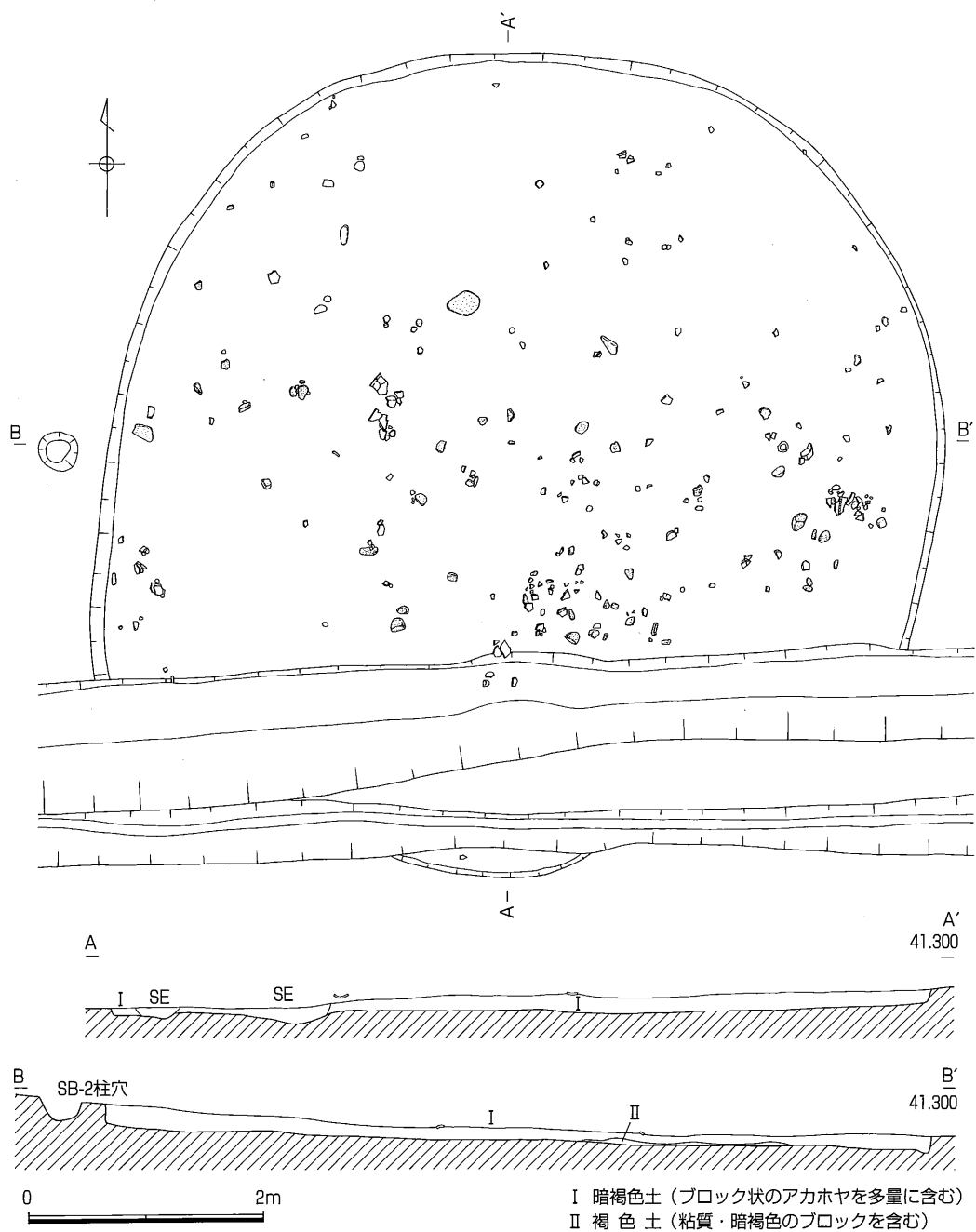
第19図 SA-4 出土遺物実測図

### 3. SA-2 (第20図 図版11)

直径約7mを計る円形プランの竪穴式住居跡で、一部を後世の溝に切られている。残存壁高は約10cmである。柱穴は確認されなかった。

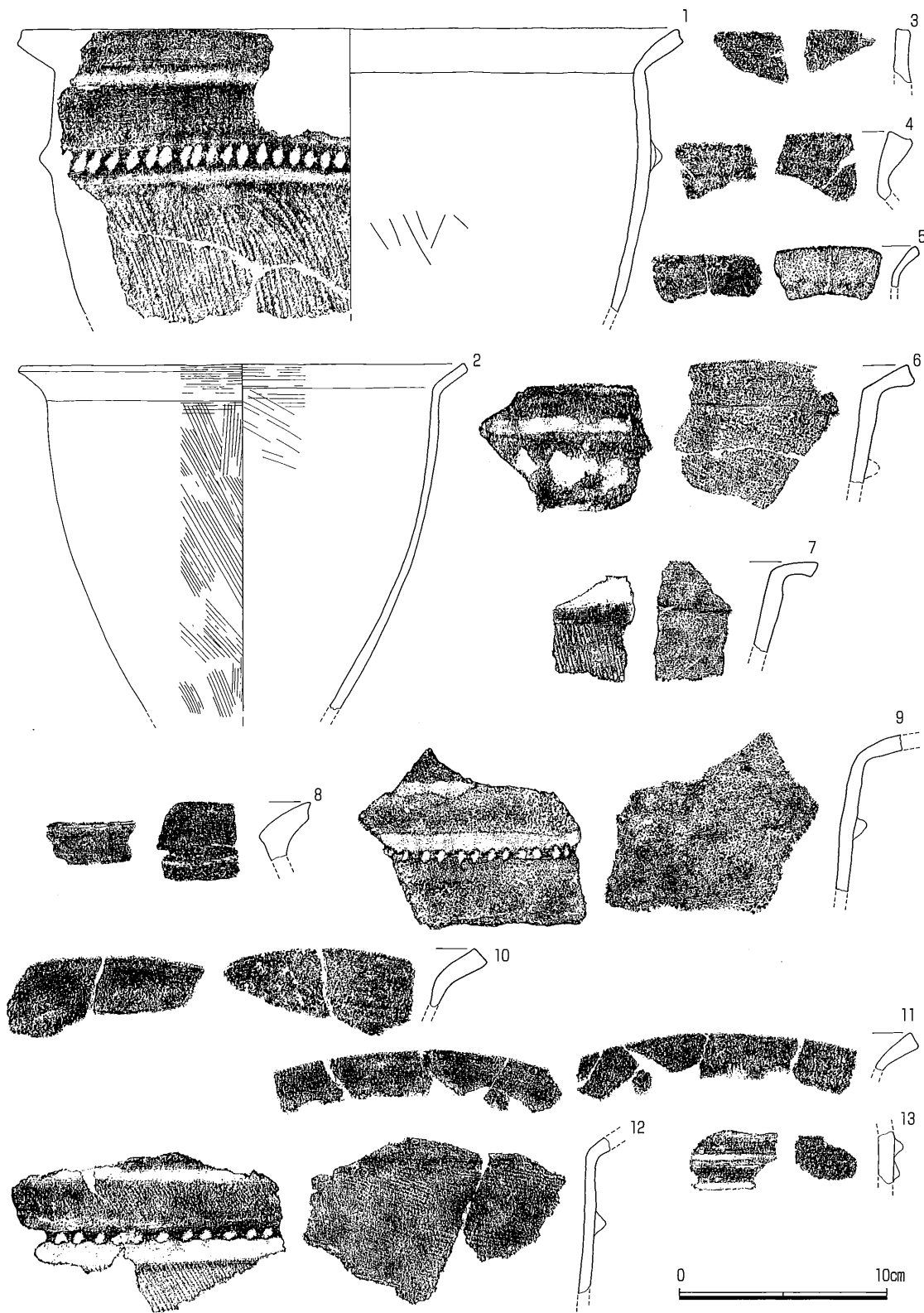
出土遺物 (第21~23図 図版26・27)

1は甕形土器の口辺から体部片でくの字に外反する口辺部を持ち、口唇部は平坦に整形されている。体部上方に最大径を持ち、一条の刻目突帯を巡らせる。外面調整は突帯上方は横ナデ、突帯下方は縦方向の刷毛目が顕著である。2は甕形土器片で底部は不明、口辺はくの字に外反し、口唇部は平坦に整形されている。体部最大径を口片部直下に持ち、体部上方に煤の付着が見られる。3~11までは甕の口辺部片でくの字に大きく屈曲し、口唇部は平坦に整形され若干肥厚する。6・9は体部上方に刻目突帯有する。8は逆L字状の口辺部片。12~18は甕形土器の体部片で12・15・16・17には刻目突帯。13には二条の突帯。14には一条の突帯が見られる。19~22は底部片で、19・20がやや上底21・22は平底である。23は土錘で欠損している。24~26は軽石製石製品で用途は不明。27・28は磨石で28

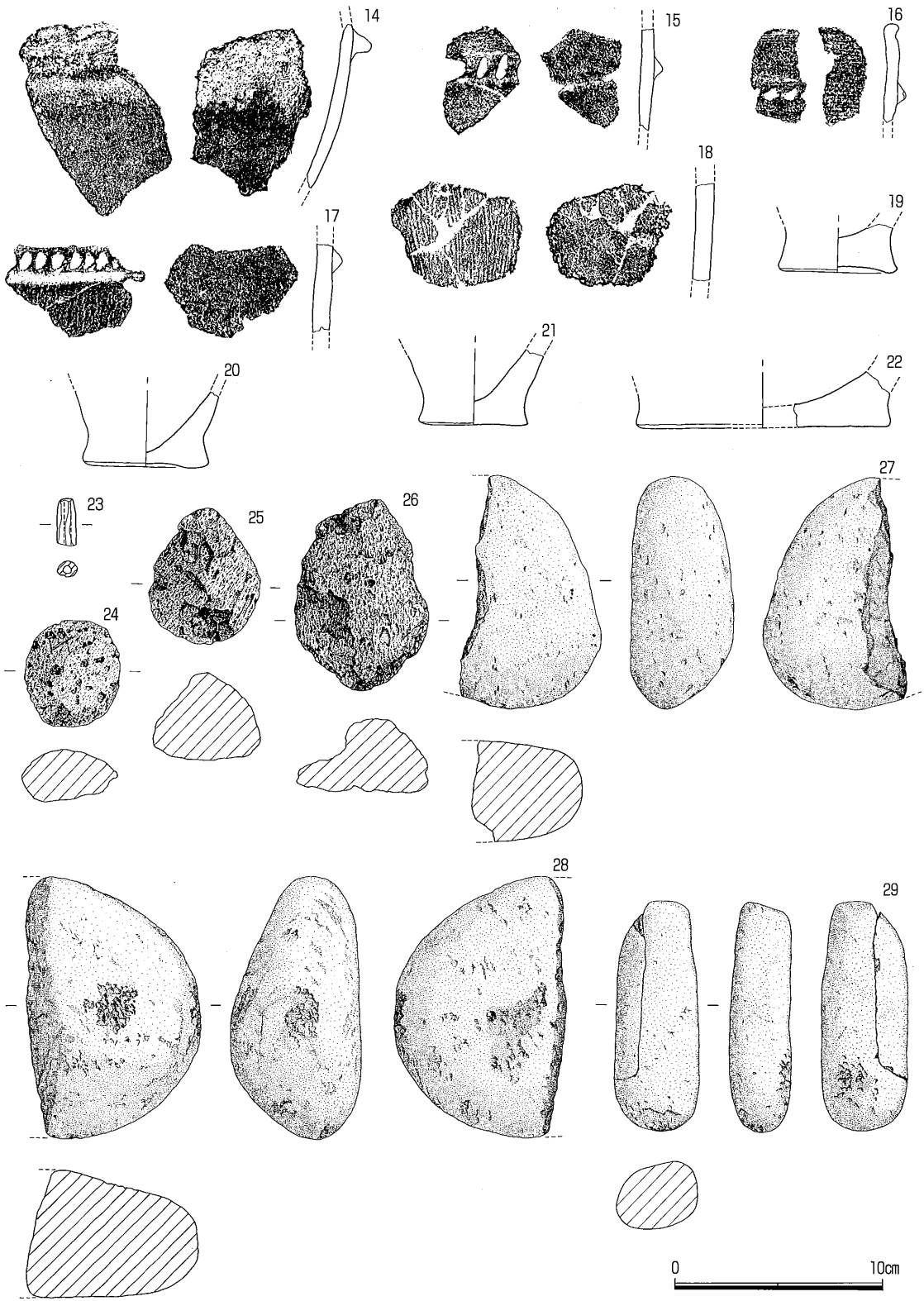


第20図 SA-2 実測図

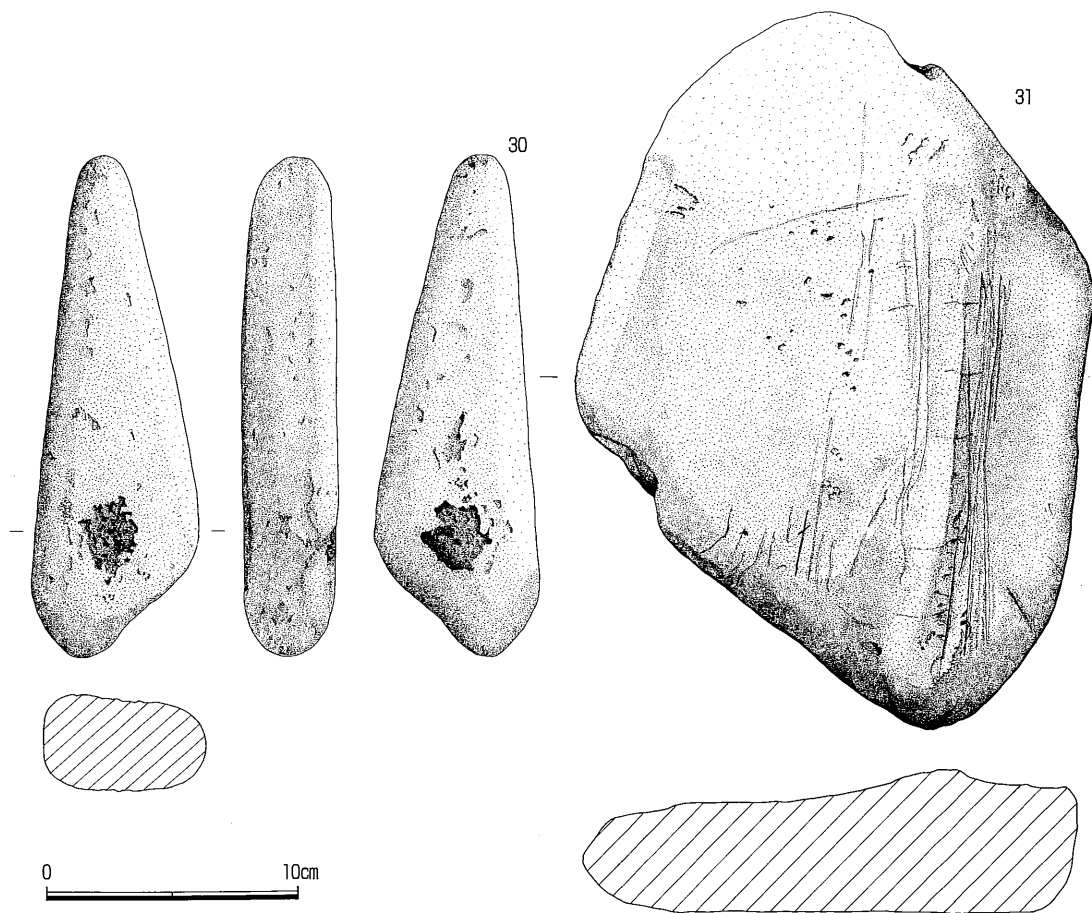
の片面中央には打痕が残る。29は叩石で一端に使用痕が認められる。30は叩石状の石器であるが、両面最大幅部分中央に打痕が残る。31は砥石で片面が溝状に摩滅し、線刻状の溝が多数残っている。



第21図 SA-2 出土遺物実測図



第22図 SA-2 出土遺物実測図



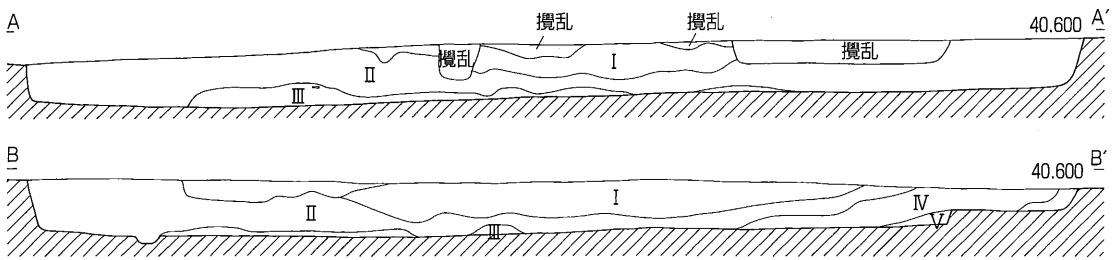
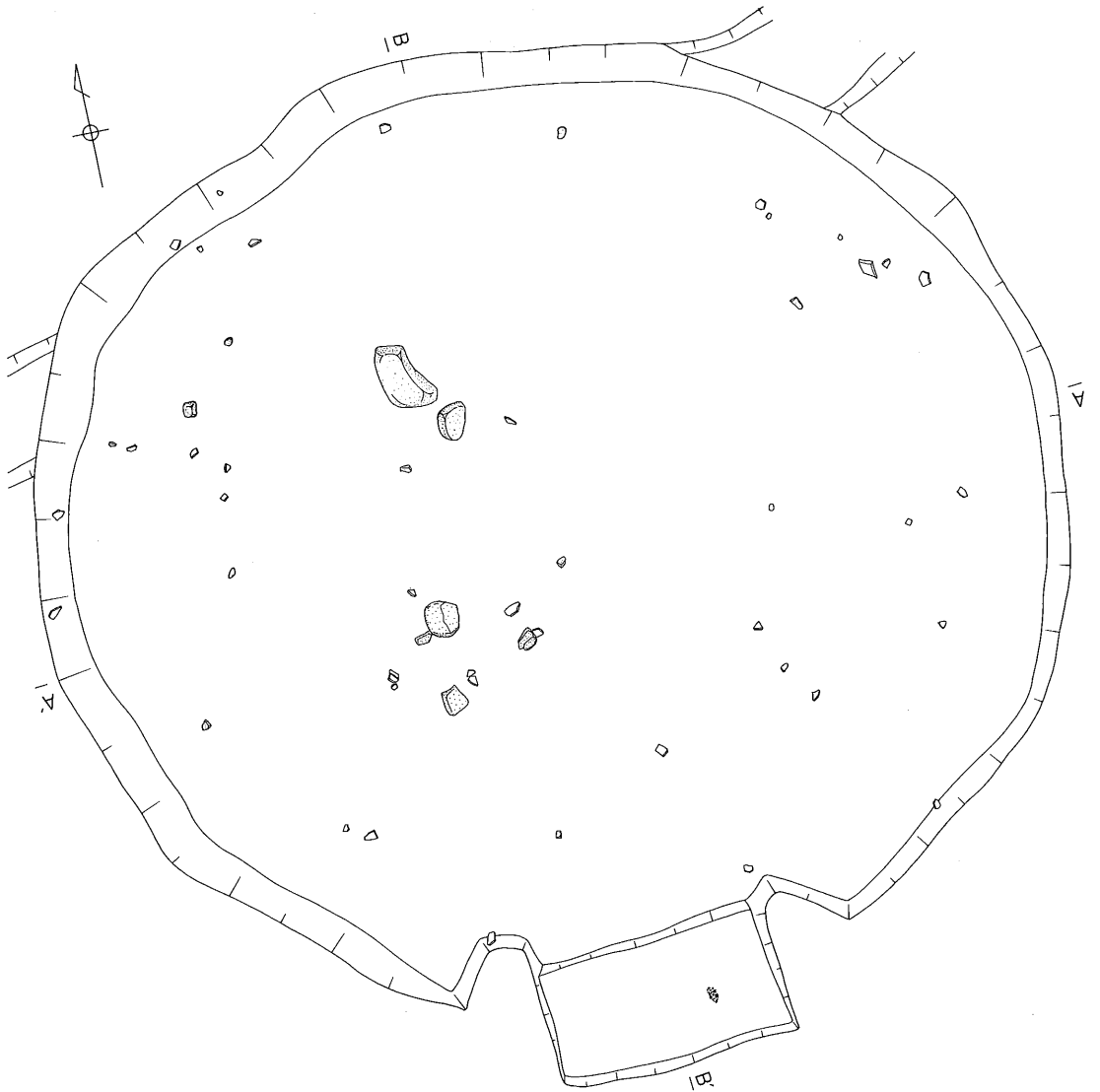
第23図 SA-2 出土遺物実測図

4. SA-3 (第24図 図版12)

直径約8.5mを計る円形プランの竪穴式住居跡で、南側に2カ所突出壁を持ち、その間に1段高いベッド状の張り出しを持つ所謂花卉形住居跡である。残存壁高は約40cm、張り出し部との床面差は約12cmである。柱穴は確認されなかった。

出土遺物 (第25・26図 図版28)

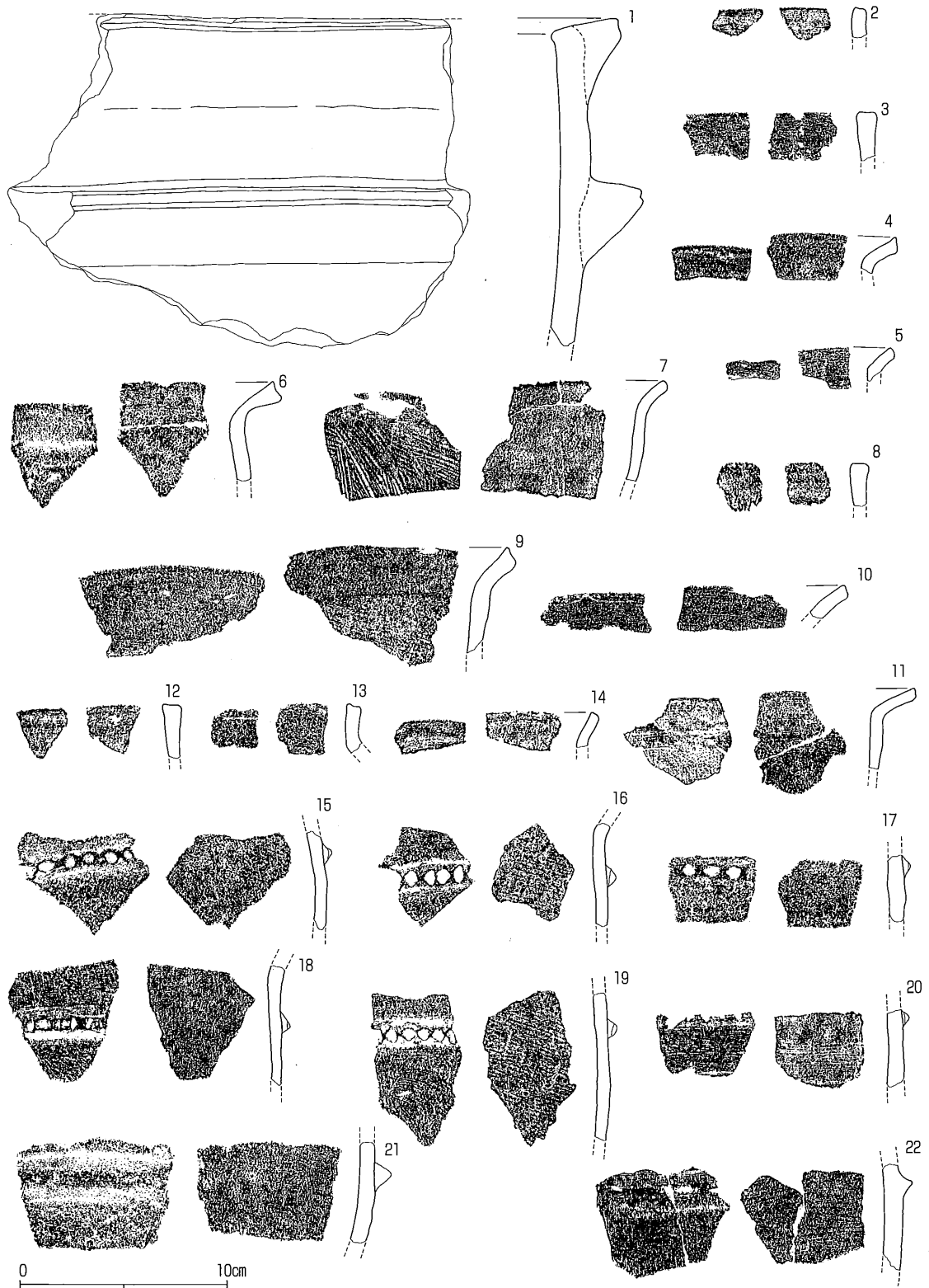
1は大型の甕形土器片、厚手の逆L字状口辺で直下に台形状の突帯を有する。2~14は甕形土器の口辺部片である。短めの口辺はくの字に屈曲し、口唇部は平坦に整形されている。このうち3・6・8・9・12・13の口辺は口唇部が肥厚するが、2・4・5・10・11は均一。7は屈曲は緩やかで口唇部は丸く整形されている。15~31は体部片で15~20は押圧気味の刻目突帯が認められ、21・22の突帯には刻目は見られない。25は壺形土器の体部片と思われ、三条の突帯が認められる。26~31は体部下方片で32は底部片である。33~35は軽石製石製品で35は片面が平坦に摩滅しており36は穿孔を有する。36については浮子と思われるものの他の性格は不明である。



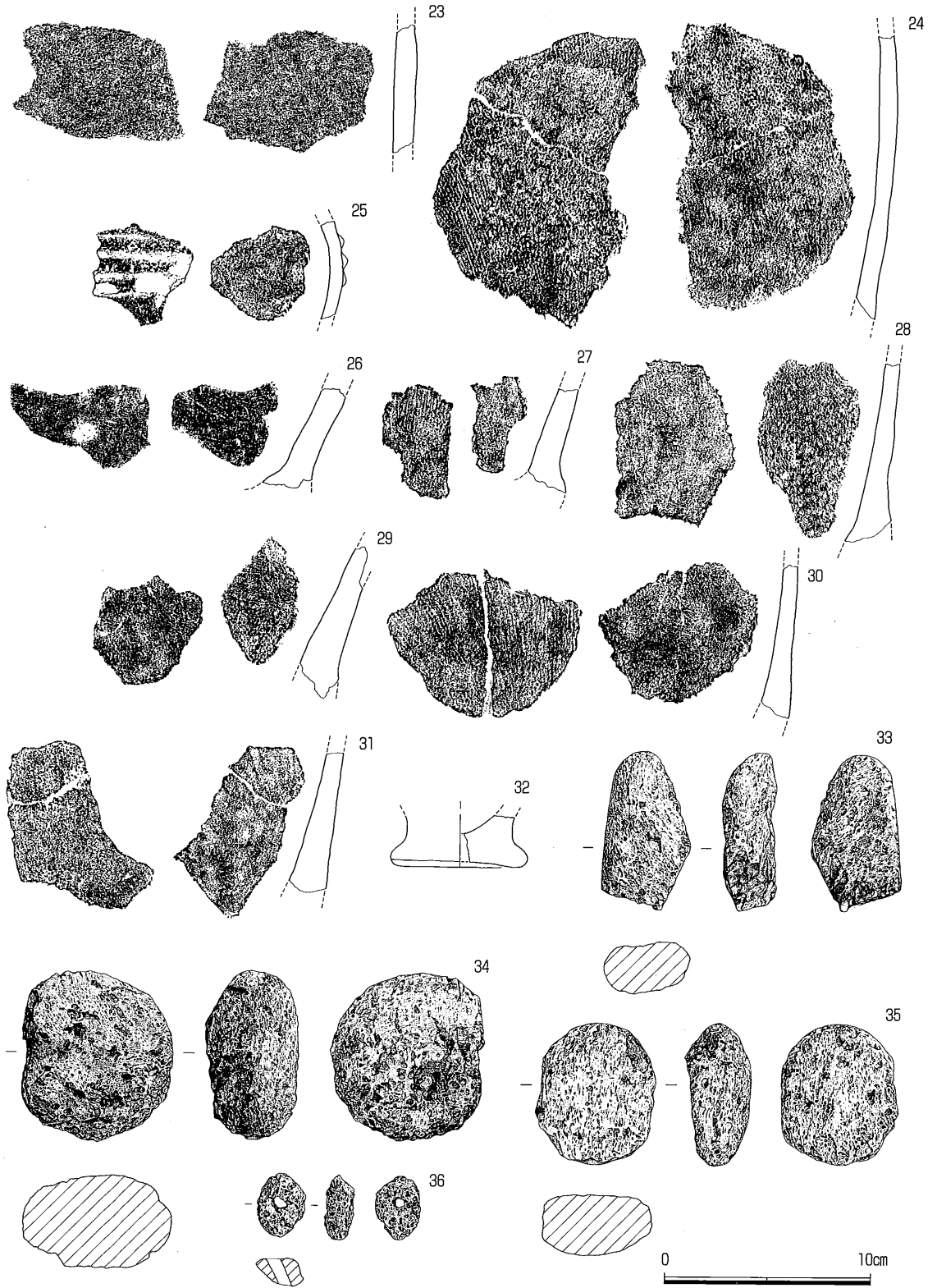
- I 黒褐色土
- II 明褐色土 (アカホヤブロックを少量含む)
- III 明褐色土 (粘質)
- IV 暗褐色土 (IIよりやや暗い色調)
- V 黒褐色土

第24図 SA-3実測図





第25图 SA-3 出土遺物実測図



第26图 SA-3 出土遺物実測図

5. SB-1 (第27図 図版13)

桁行3間×梁行3間の掘建柱式建物跡で棟持柱を有する。桁行5.1m、梁行4.2m、棟持柱間6.2mを計る。SA-2と切り合っており、埋土観察からSA-2が先行する。

6. SB-2 (第27図 図版13)

桁行3間×梁行3間の掘建柱建物跡で、棟持柱を有する。桁行4.9m、梁行3.7m、棟持柱間6.2mを計り、西側の棟持柱跡は桁方向に長楕円形を呈している。SB-1と切り合っているが新旧関係は不明である。

7. SB-3 (第27図 図版13)

桁行4間×梁行3間の掘建柱建物跡で、桁行4m、梁行3.5mを計る。柱の並び及柱間是不揃いである。

8. SB-4 (第27図 図版13)

桁行3間×梁行3間の掘建柱建物跡で、桁行約4.3m、梁行約3.6mを計る。やや柱間が不揃いな建物跡である。

9. SB-5 (第27図 図版13)

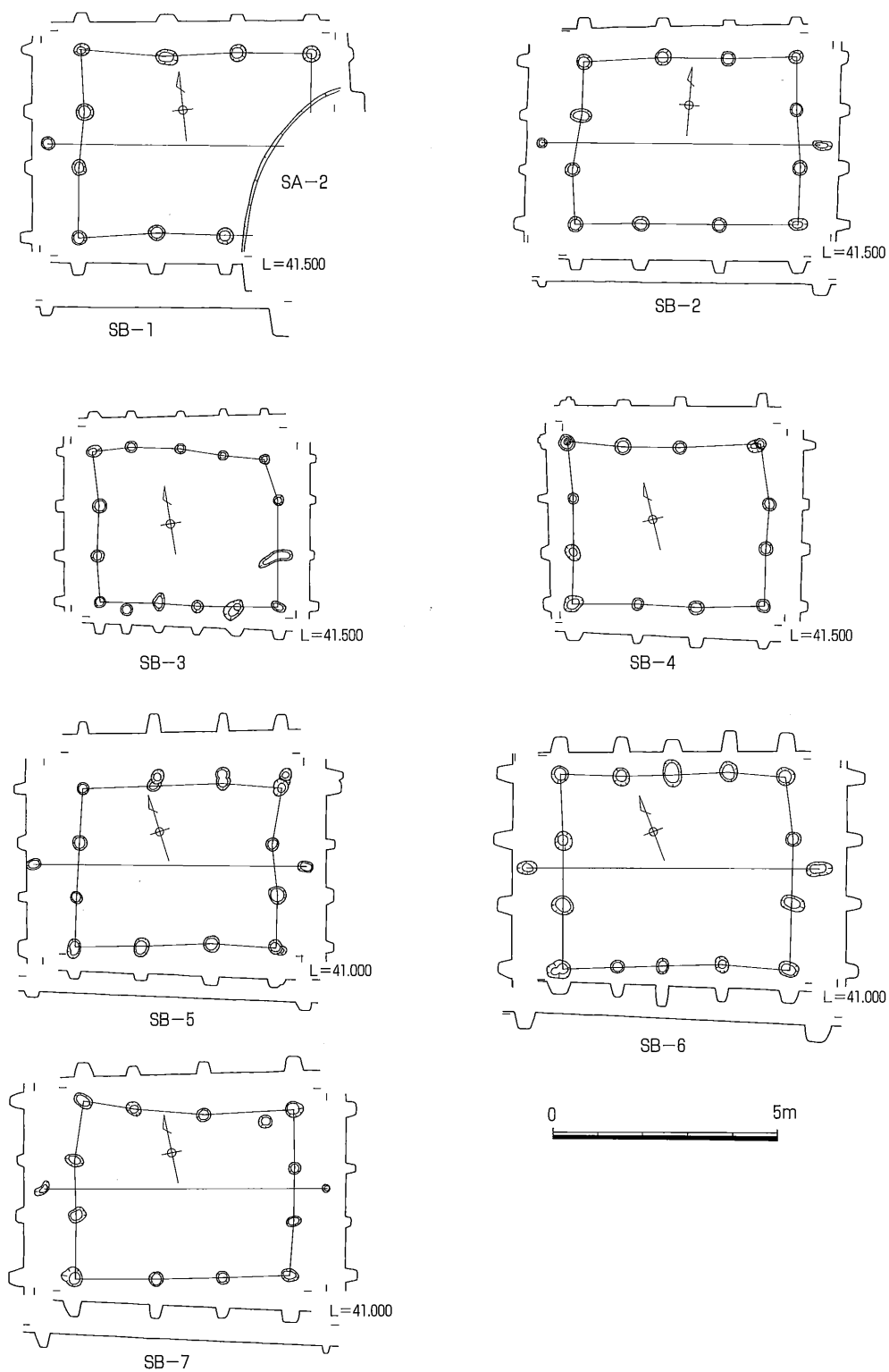
桁行3間×梁行3間の掘建柱式建物跡で棟持ち柱を有する。桁行約4.5m、梁行約3.5m、棟持柱間6.1mを計る。

10. SB-6 (第27図 図版13)

桁行4間×梁行3間の掘建柱式建物跡で棟持ち柱を有する。桁行約5.1m、梁行約4.3m、棟持柱間6.7mを計る。本調査区中の掘建柱建物跡中もっとも大型のものである。

11. SB-7 (第27図 図版13)

桁行3間×梁行3間の掘建柱建物跡で棟持柱を有する、桁行約4.8m、梁行約3.7m、棟持柱間6.4mを計る。棟持柱の柱穴が比較的小さな特徴を有する。



第27图 掘建柱式建物跡実測図

## 第5節 その他の遺構と遺物

### 1. SC-9 (第28図)

平面形は不整な楕円形を呈し、80×50cmを計る。深さは約10cmで埋土中から土器1片が出土した。

出土遺物 (第28 図版28)

出土遺物は外面に刷毛目を顕著に残す甕形土器の体部片一点のみである。

### 2. SC-10 (第30図 図版14)

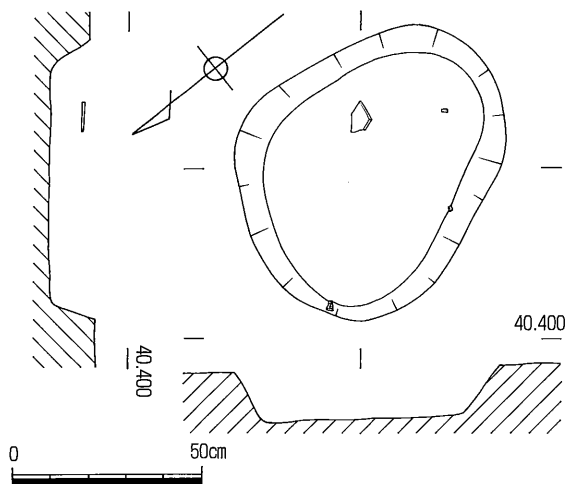
平面形は円形で経約75cm、深さ約35cmを計る。埋土中上層部に集中して遺物が出土したが、この部分の埋土だけしまりが無く、遺物も礫中に土器片が含まれる状況であった。また縄文土器主体ながら、後世の瓦片も混在しており、耕作等により出土した土器や瓦礫を廃棄した遺構である可能性が高い。

出土遺物 (第31・32図 図版30)

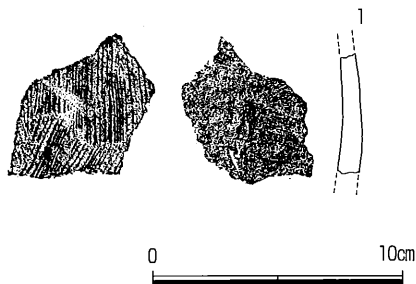
近世の瓦片や礫も出土しているが、土器、石器のみ示す。1～7は磨研土器で1～5は浅鉢形土器の口辺部片。6・7は体部片である。8以下は粗製の土器片で8～15は口辺部片。内8～12は直線的な口辺、13～15はやや外反する。16～24は体部片で16・17は屈曲部が認められ、浅鉢形土器と思われる。25は底部片。26は砂岩製の磨石である。出土遺物は縄文期に限定され、瓦片1点と埋土の状況が無ければ縄文期の土壌として処理してしまいそうな遺構である。

### 3. SC-5 (第33図 図版15)

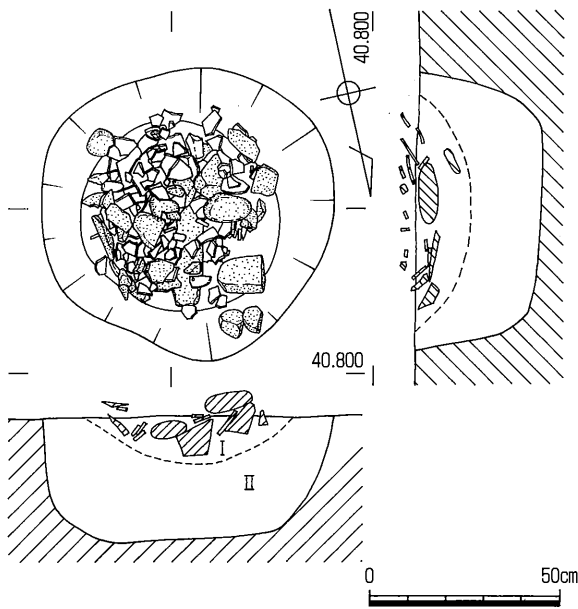
長辺約2m、短辺約80cmの長方形プランを呈する。検出壁高は約20cm、埋土は下部にアカホヤ塊を少量含む黒色土で遺物の出土は無い。



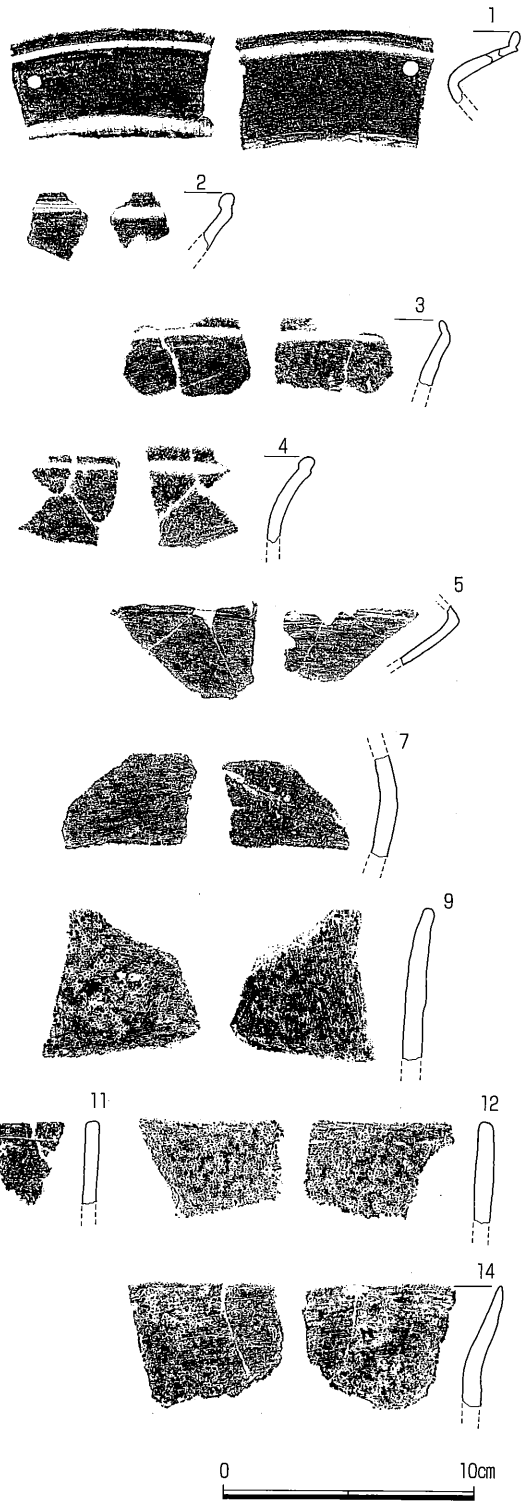
第28図 SC-9 実測図



第29図 SC-9 出土遺物実測図

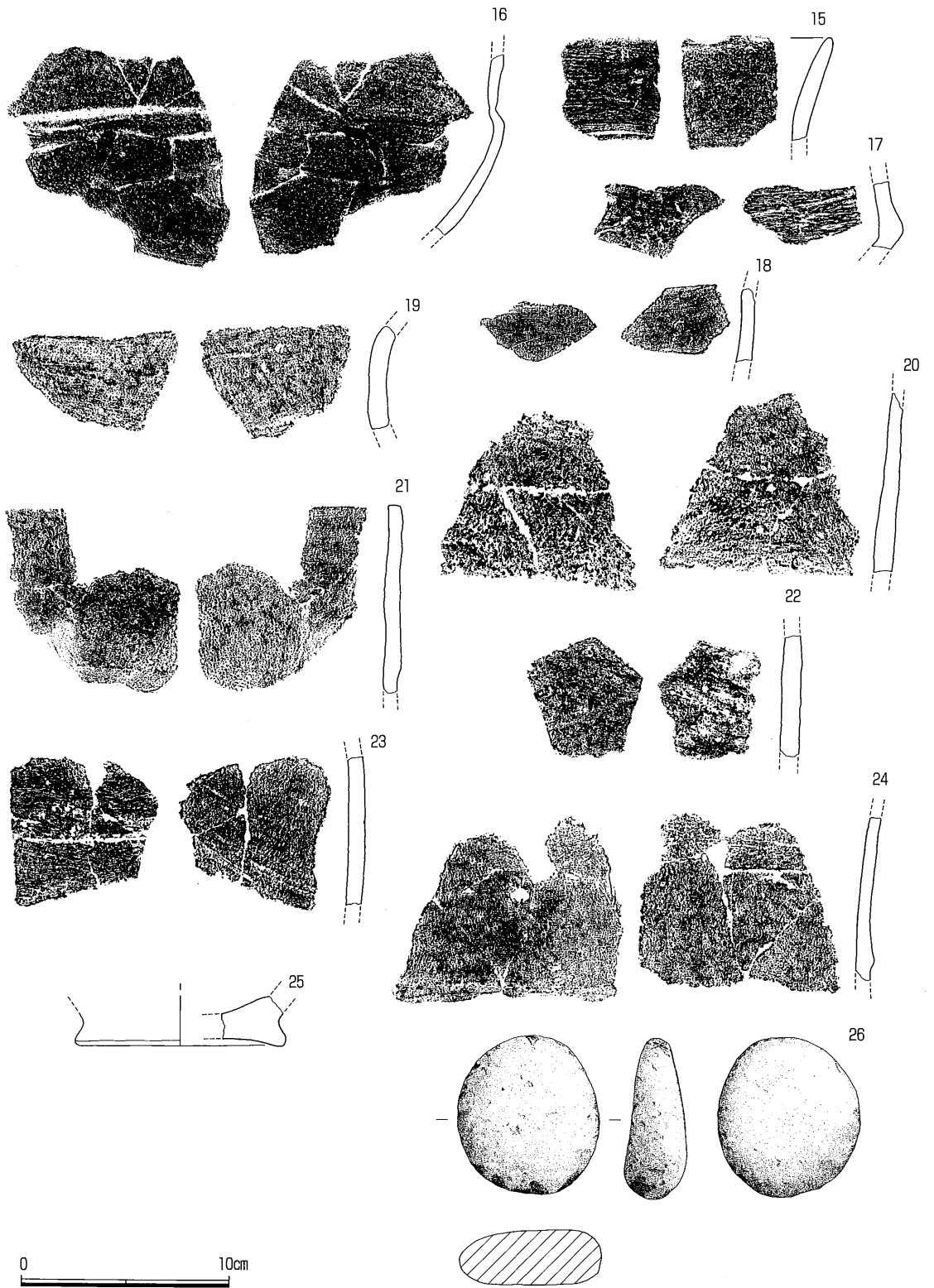


第30图 SC-10实测图

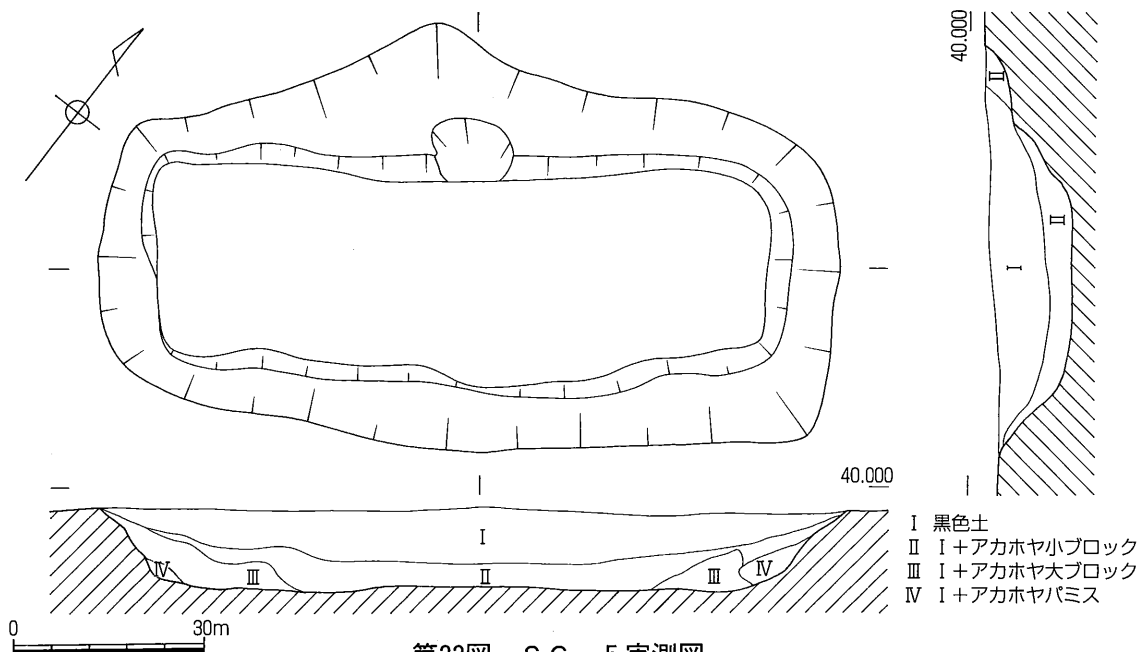


第31图 SC-10出土遺物实测图





第32図 S C-10出土遺物実測図



## 第6節 まとめ

本遺跡における縄文期の遺構は調査区東端に集中していて遺構はいずれも土壌である。今回弥生期の遺構、遺物の集中により調査時三角堀遺跡として括っていた中から本調査区を切り離し、字名から田代堀第2遺跡としたが、縄文期の遺構遺物については三角堀遺跡から本遺跡東端まで散漫な様相で続いている。

出土遺物については、全体像を捉えきる資料は無く、精製磨研と粗製土器が混在している。傾きすら明確にできない資料であるが、精製磨研土器の口辺部形態を見ると、63年度調査の田代堀第1遺跡において出土した資料より先行するものと思われ、近郊で多数の資料が確認された平畑遺跡出土資料とつき合わせても三万田、五領期に後出する晩期前半代に比定されるものと思われる。

弥生期については方形、円形の竪穴式住居跡が検出され、SA-3については所謂花卉形住居である。形態的には異なる住居跡であるが、遺構内遺物を比較するとそれほど時期差を感じさせない。いずれも中溝式の甕形土器を主体とし、SA-1には下条式の名残を引く直口の甕口縁が見られる。中溝式甕の口辺部を比較すると。いずれも口唇部を平坦に整形するが、方形住居跡のものとは比べ、円形住居跡のものはくの字の屈曲は大きく、口唇部に向かって厚みを増す傾向が伺われる。L字形口縁からの流れを考えれば円形が方形に先行する状況が捉えられよう。時期的には後期初頭代に比定できるものと思われる。

掘建柱式建物跡については棟持ち柱を持つものが大半を占め、町内でこの形態は初見である。伴う遺物については見いだせなかったが、SB-1とSB-2。SB-4とSB-5が切り合い関係にあり、時期差が伺われる。また棟持ち柱を持つSB-1と円形竪穴式住居跡のSA-2も切り合っており、この新旧関係についてはSA-2の埋土観察でSB-1の柱穴3カ所は確認出来ず、SB-1が先行することが捉えられている。

## 第3章 田代堀遺跡D・E・F地区

### 第1節 調査の概要（第34図図版16～18）

本調査区については県営圃場整備事業に伴い台地中央部を東西に走る町道について拡幅整備を行うこととなり、工法上その掘削を平成3年度圃場整備事業のなかで行うことが急遽判明したため、確認の意味も含め調査をおこなったものである。

調査区は町道に沿い、西からD地区、F地区、D地区南側の道路部分がE地区となる。D地区及びE地区は昭和63年度調査の田代堀代1遺跡に隣接する。

### 第2節 調査区の状況

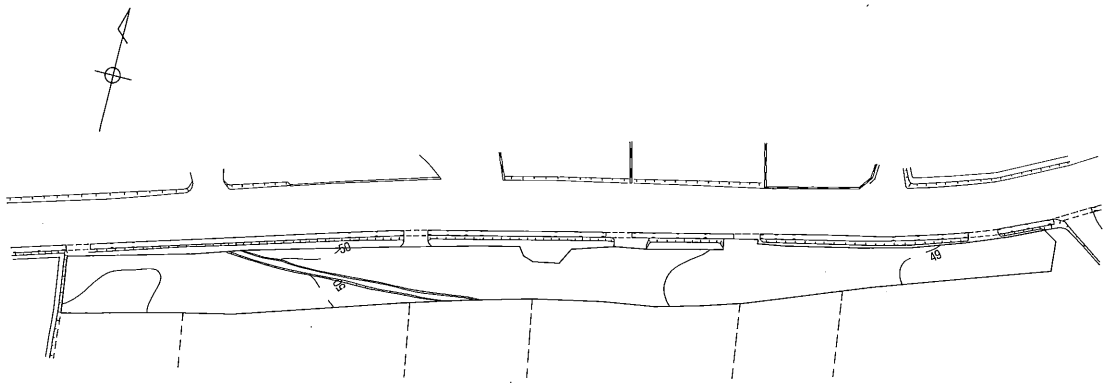
D地区は調査面積752m<sup>2</sup>で、耕作土を除去した段階でアカホヤ層が薄く残存する状態で、耕作土中や周辺畑地の表面に土器片、陶磁器片が若干見られるが、包含層は破壊されており、調査区内には多数の堀込みが見られるもののほとんどが耕作土を埋土としており、遺構としては川原石を含み黒色腐植土を埋積土とする溝状遺構1条を検出したのみであった。

E地区は調査面積950m<sup>2</sup>で、すでにアカホヤ層下まで削平されており、耕作土下は粘質土およびその下層の礫層が露頭する状態で、縄文土器の小片が耕作土中から出土したのみであった。

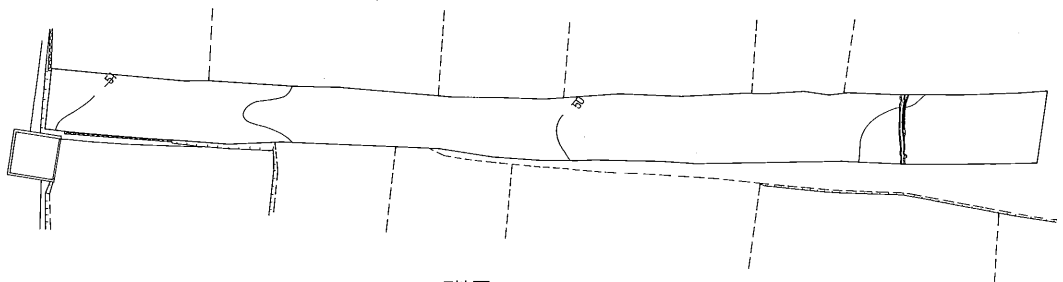
F地区は調査面積800m<sup>2</sup>で、土壌を中心に若干の遺構の検出があったが、縄文土器片や陶磁器片といった少量遺物は耕作土中からの出土で、遺構の性格や時期判断には繋がらなかった。

### 第4節 まとめ

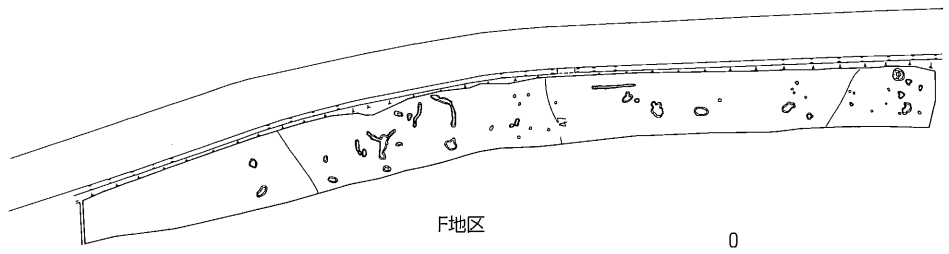
本調査区は時間的な問題から試掘調査を十分に行えないまま本調査となったため、地下遺構の存在を探りながらの調査となったが、現在比較的平坦に見える本台地上の地形ももともとは僅かながら起伏のあったことが、トレンチ状となった今回の調査で伺い知ることができた。残念ながら小面積であり、旧地形の復元は不可能であったが、工法上、面的調査の少なかった本台地上の空間を埋める一資料となった。



D地区



E地区



F地区



第34图 田代堀 D・E・F 地区全体图

圖 版

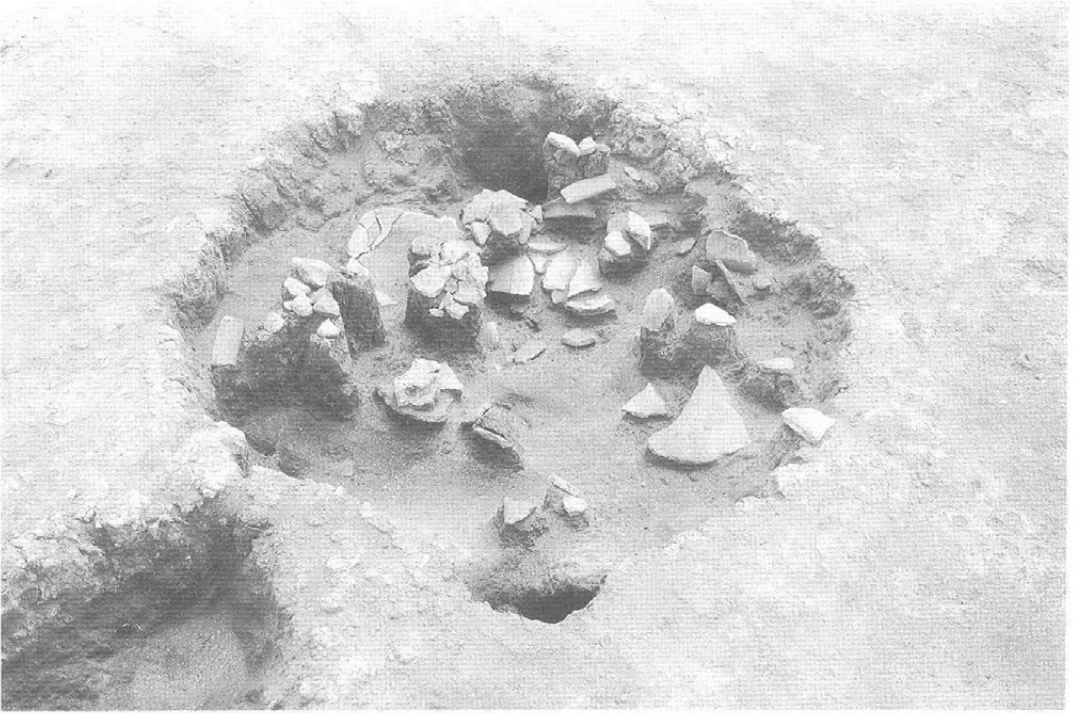


図版1 田代堀第2遺跡全景

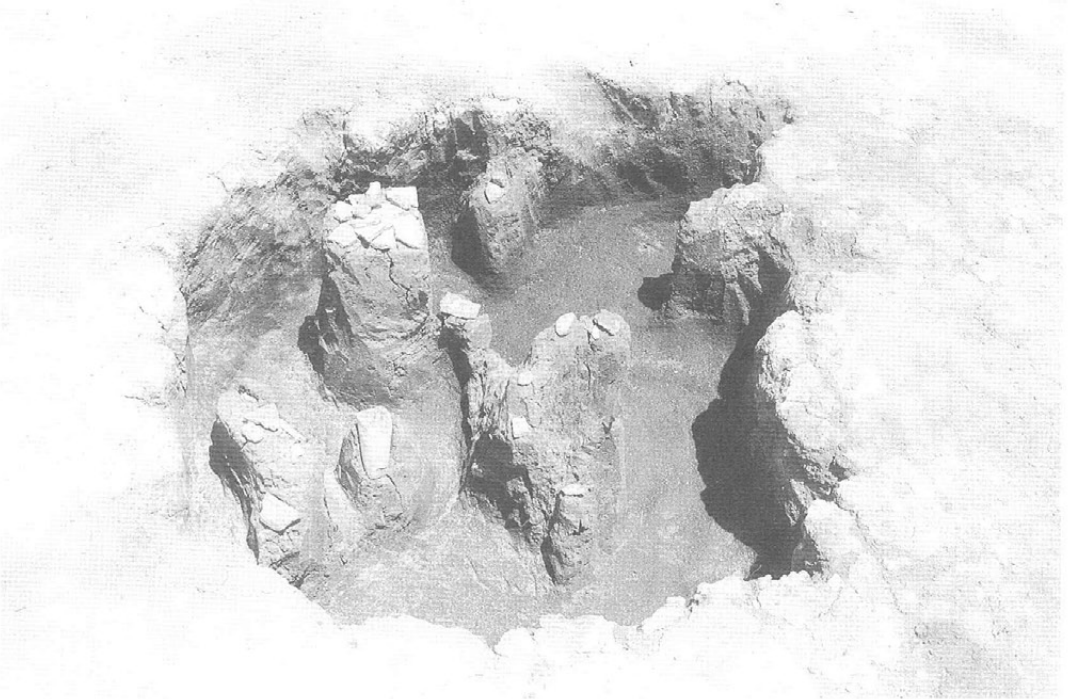


図版2 縄文期土坑集中地区





図版3 SC-3検出状況



図版4 SC-4検出状況



図版5 SC-6 検出状況



図版6 SC-7 検出状況



图版7 SC-8 検出状況



图版8 弥生期遺構集中地区

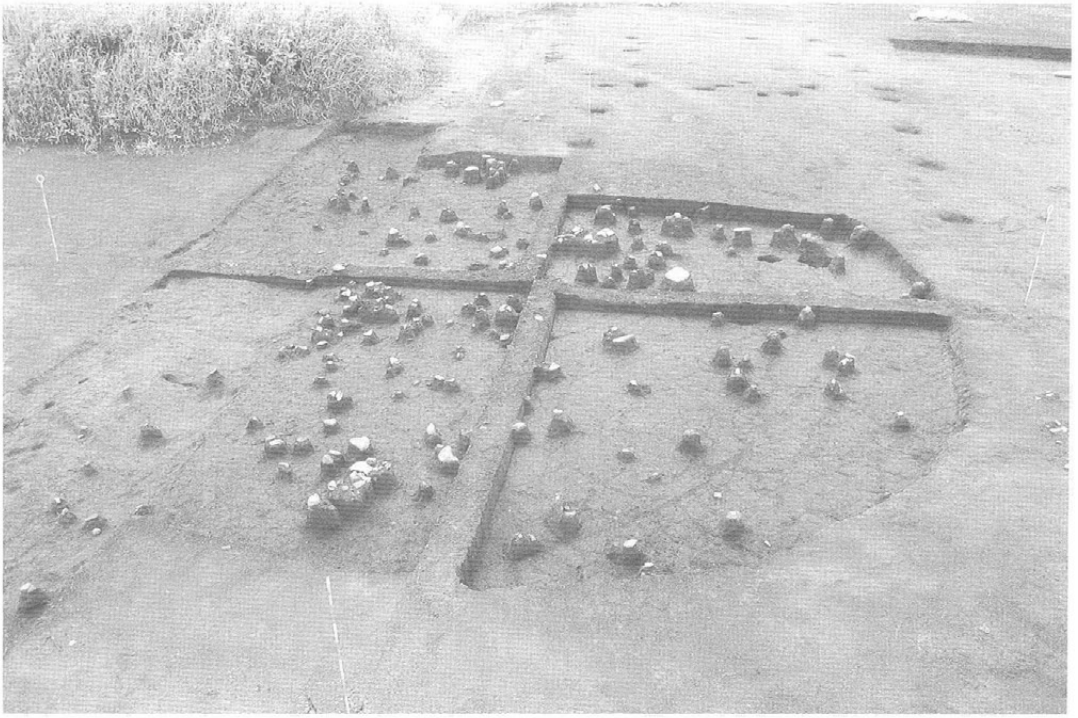


図版9 SA-1検出状況

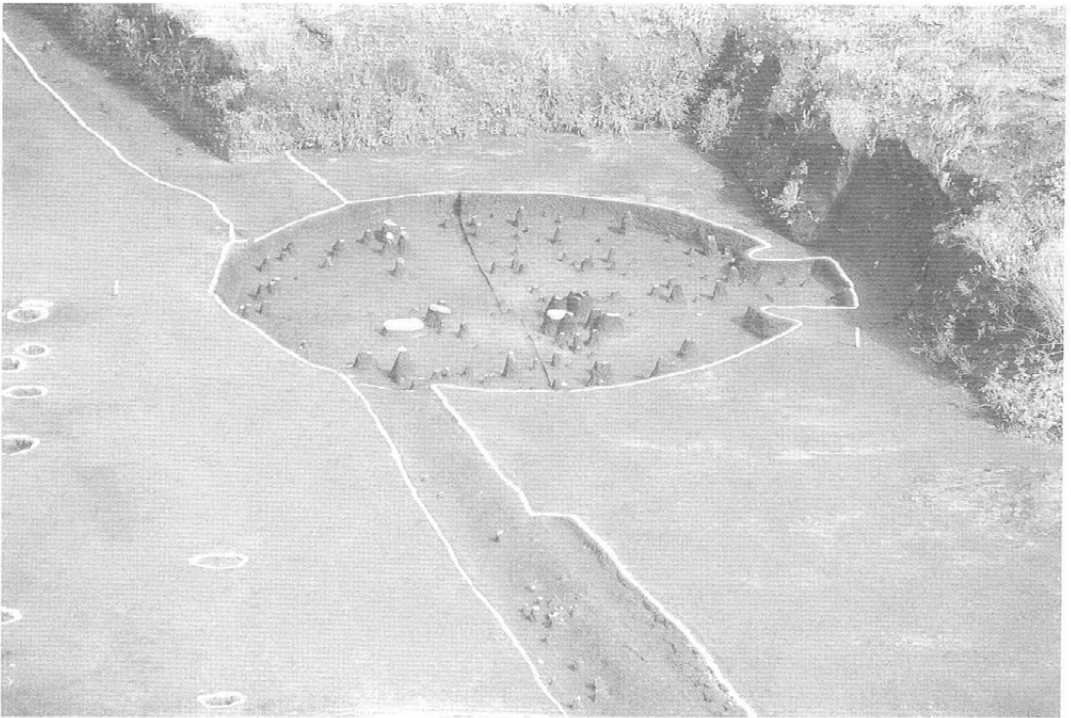


図版10 SA-4検出状況

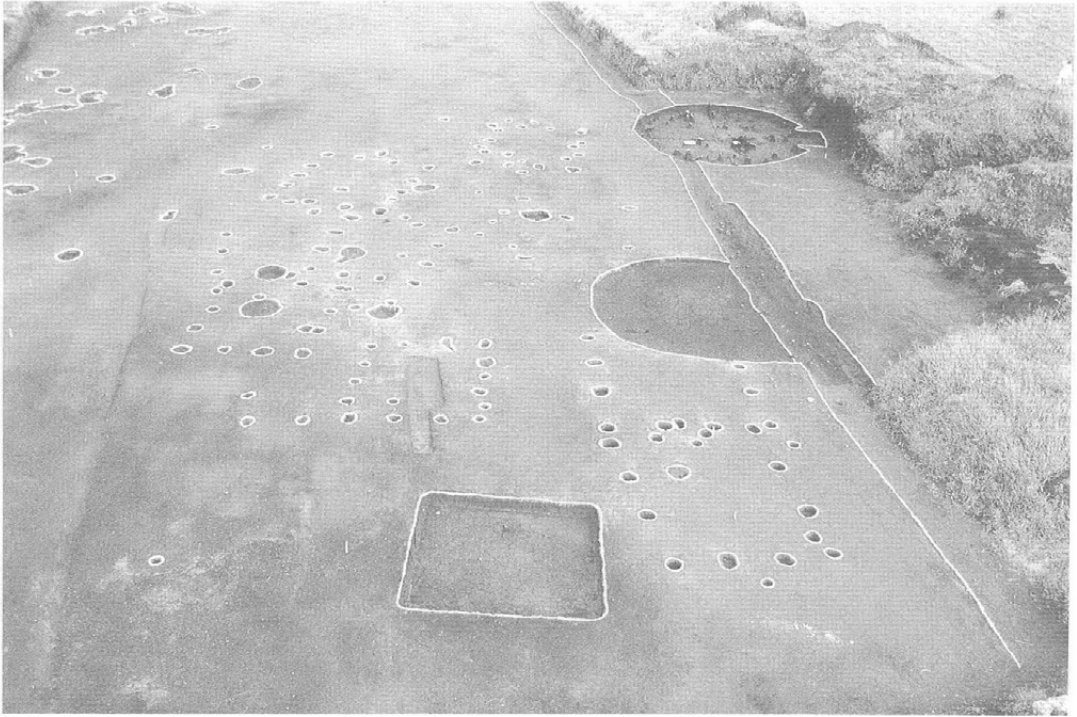




図版11 SA-2 検出状況



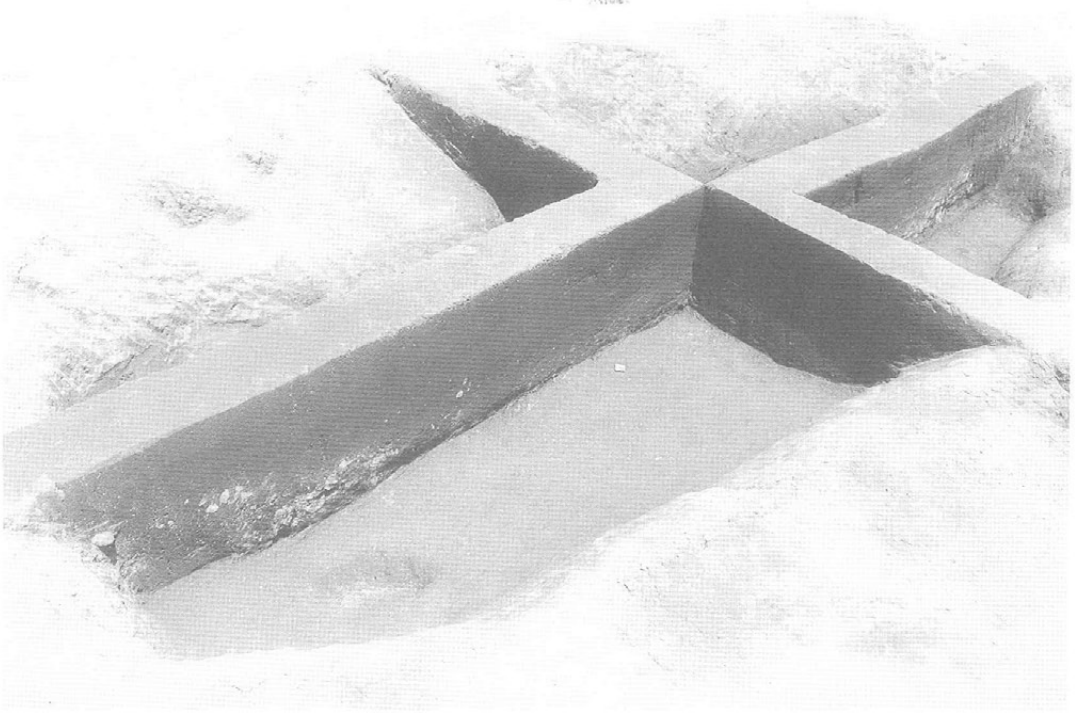
図版12 SA-3 検出状況



図版13 掘建柱式建物跡検出状況



図版14 SC-10確認状況



図版15 SC-5 検出状況



図版16 田代堀遺跡D地区全景

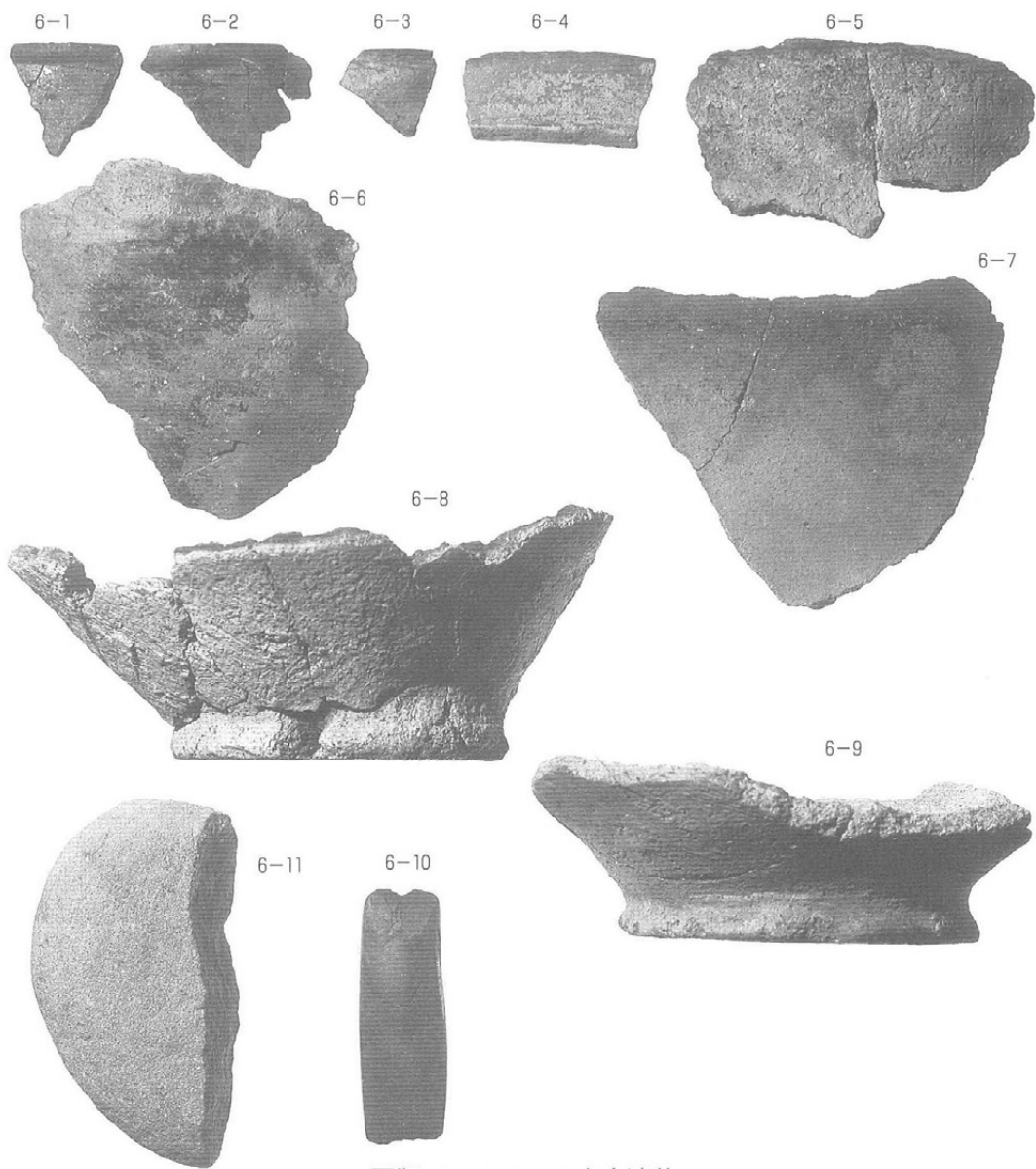


図版17 田代堀遺跡F地区全景

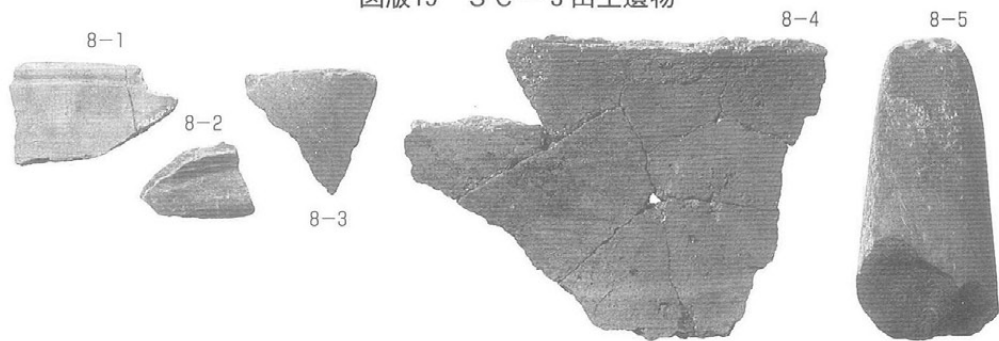


図版18 田代堀遺跡E地区全景

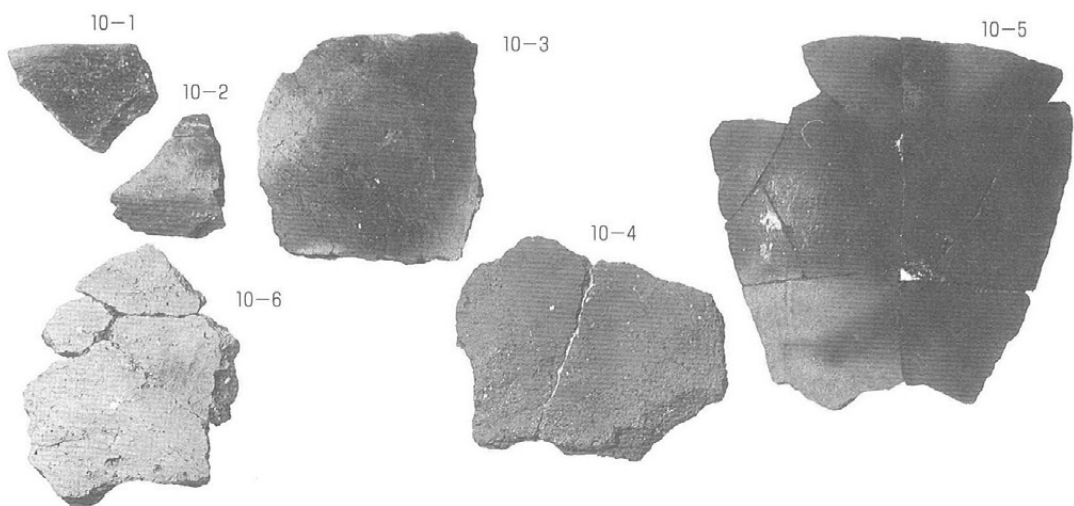




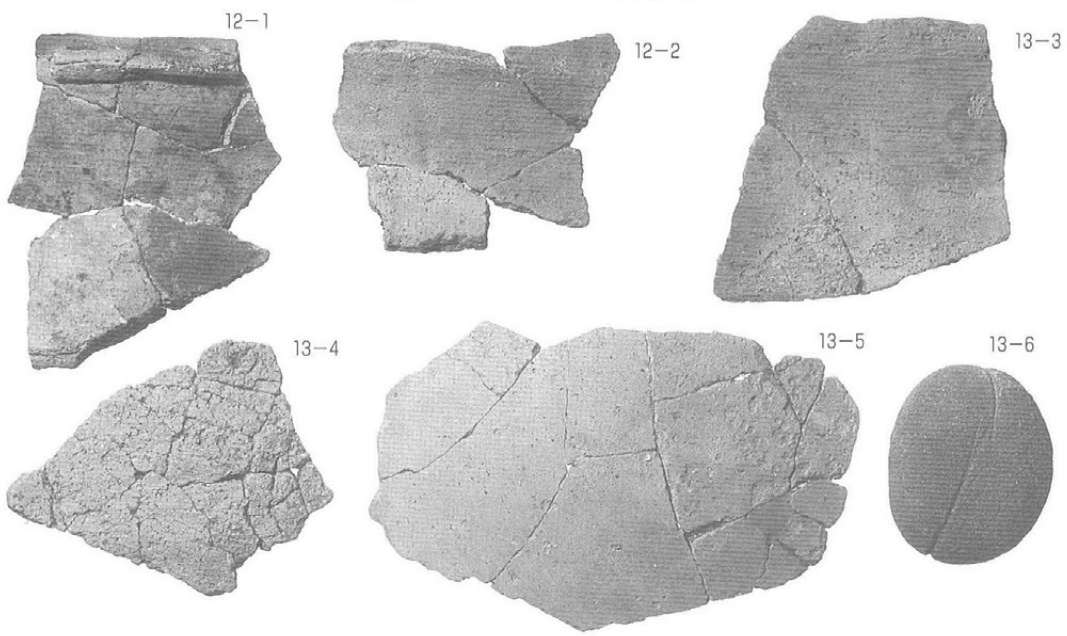
图版19 SC-3 出土遺物



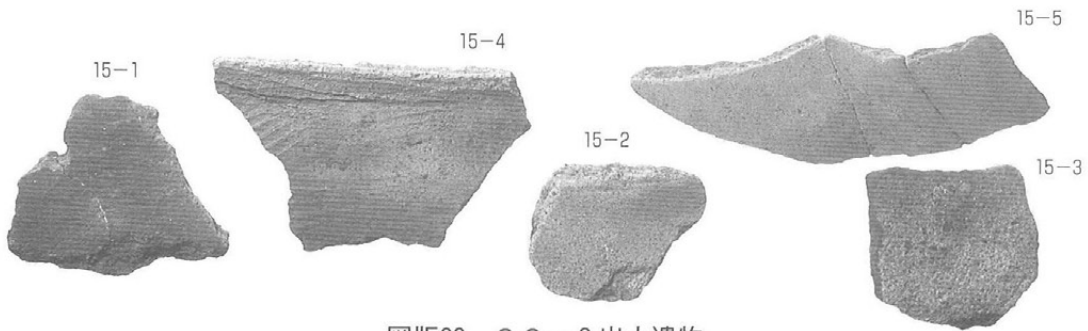
图版20 SC-4 出土遺物



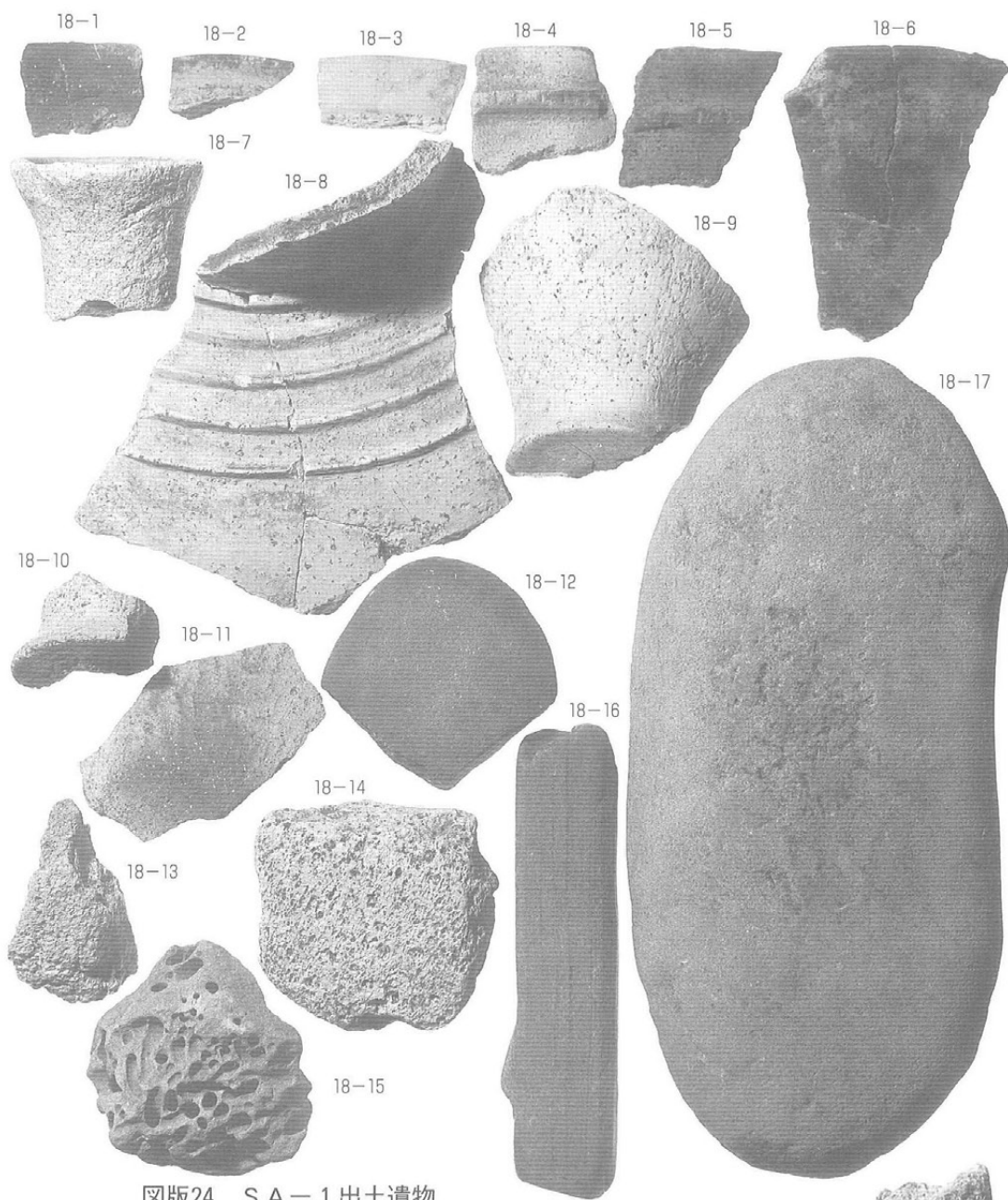
图版21 SC-6 出土遺物



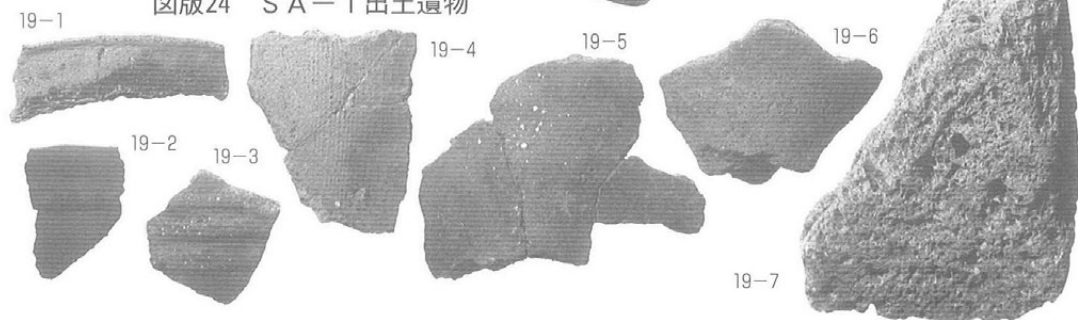
图版22 SC-7 出土遺物



图版23 SC-8 出土遺物



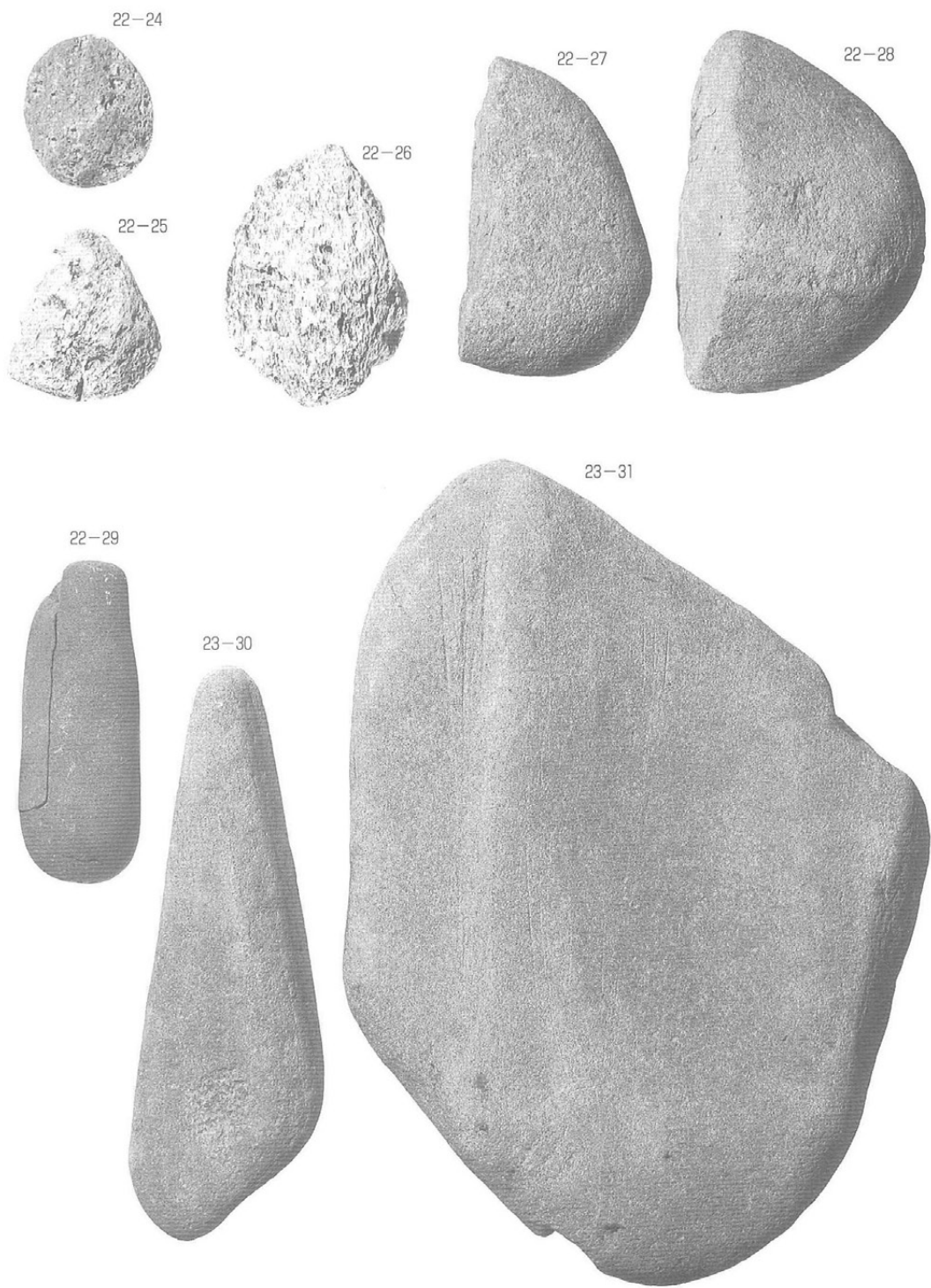
図版24 SA-1 出土遺物



図版25 SA-4 出土遺物

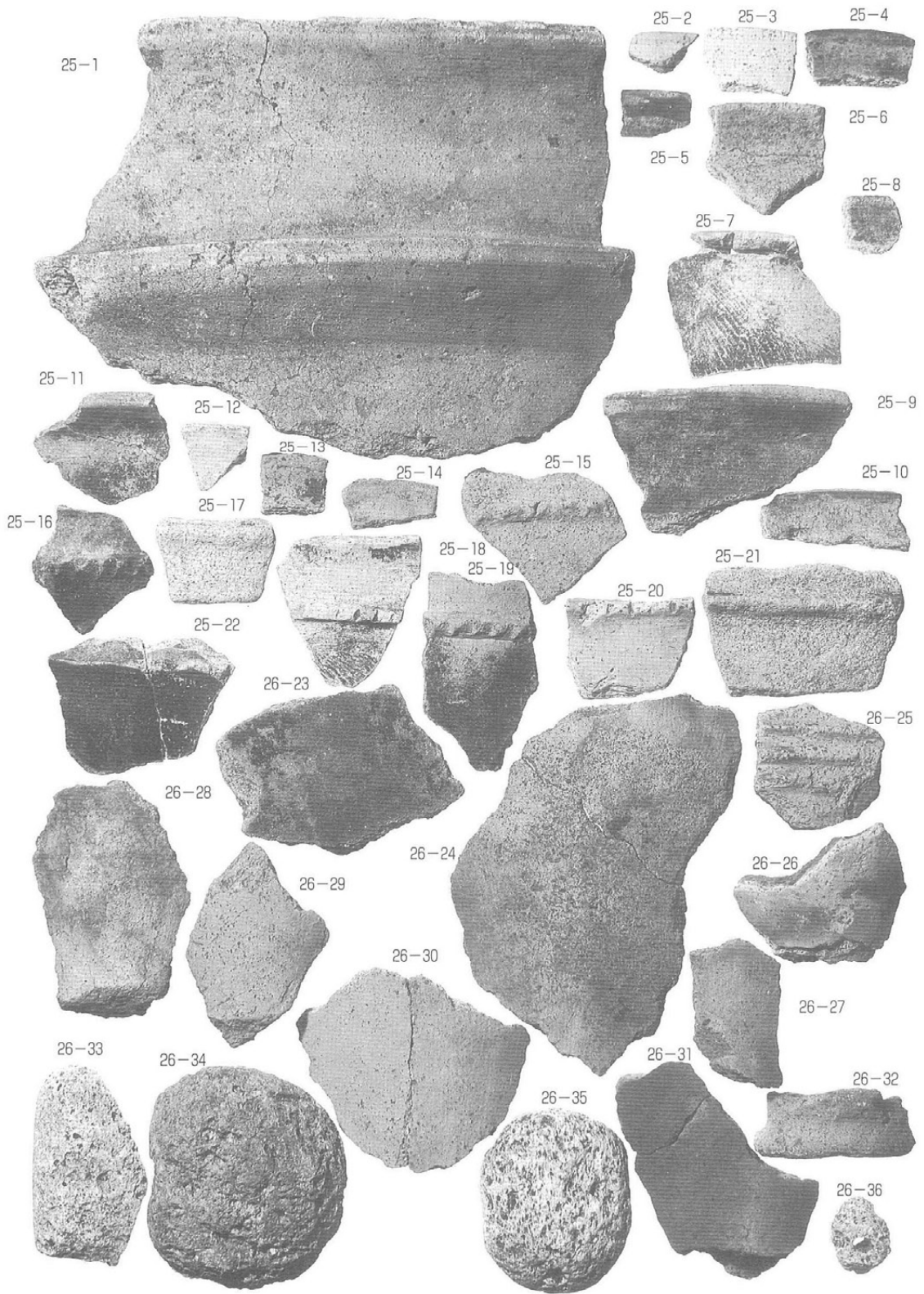


図版26 SA-2 出土遺物

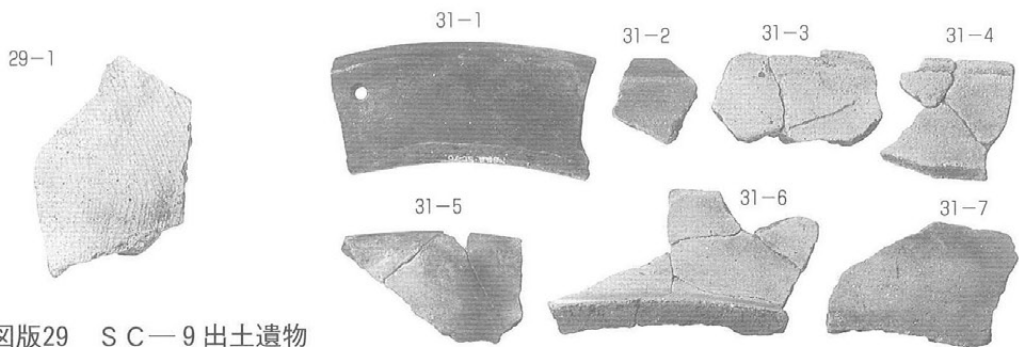


图版27 SA-2 出土遺物

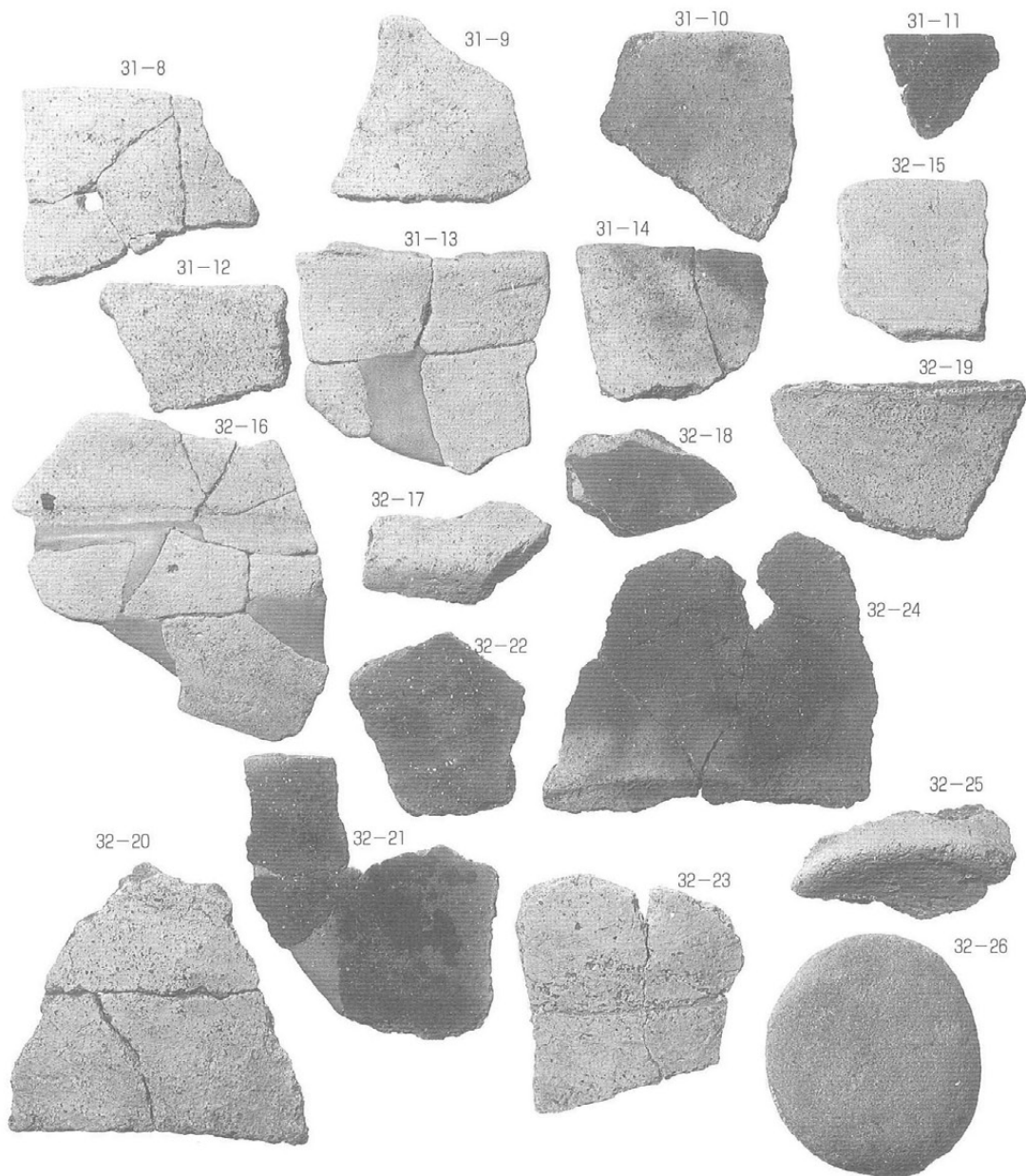




图版28 SA-3 出土遺物



図版29 SC-9出土遺物



図版30 SC-10出土遺物

清武町埋蔵文化財調査報告書 第4集

角上原遺跡群Ⅱ

田代掘第2遺跡

田代掘遺跡D・E・F地区

発行年月 平成5年3月

発行 清武町教育委員会

印刷 (株)昭和印刷



